

Netra Blade X3-2B (旧 Sun Netra X6270 M3 Blade)

設置ガイド

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	5
プロダクトノート	5
関連ドキュメント	5
フィードバック	6
サポートとアクセシビリティ	6
ブレードの機能とコンポーネント	7
ブレードの機能	7
ブレードのフロントパネルの機能	9
ブレードの背面パネルの機能	11
UEFI BIOS	12
仕様	12
ブレードの取り付け	15
取り付けの概要	15
ブレードの取り付け準備	16
出荷目録一覧	16
ESD と安全対策	17
追加コンポーネント	18
シャーシの準備	19
ブレードを取り付ける	19
ブレードの配線	23
関連情報	24
3 ケーブルドングルをブレードに接続する	24
VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する	25
キーボードおよびマウスをドングルまたはブレードに接続する	26
シリアルデバイスをドングルに接続する	27
CMM NET MGT ポートにケーブルを接続する	27
Oracle ILOM への接続	29
Oracle ILOM の概要	29

Oracle ILOM SP IP アドレスの特定	35
ブレード SP Oracle ILOM へのログイン	41
Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス	45
ソフトウェアとファームウェアの設定	51
Oracle System Assistant へのアクセス	51
ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)	56
オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ	57
オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備	59
サポートされているホストバスアダプタ	59
ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)	63
仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティ)	65
インストール済み Oracle Solaris OS の構成	69
Oracle Solaris OS のドキュメント	69
構成ワークシート	70
インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する	72
インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成	77
Oracle VM Server 構成ワークシート	77
インストール済み Oracle VM Server を構成する	78
Oracle VM ソフトウェアの更新	81
Oracle VM 入門	82
インストールに関する問題のトラブルシューティング	85
ブレードの電源切断による正常な停止	85
ブレードの電源切断による即時停止	87
ブレードのリセット	89
ブレードの障害の特定	90
ブレードの電源状態のトラブルシューティング	90
技術サポート情報ワークシート	91
システムのシリアル番号の確認	92
索引	95

このドキュメントの使用方法

このドキュメントでは、サポートされているブレードシャーシにブレードを取り付ける方法と、ソフトウェアおよびファームウェアのアップデートおよびリリースをダウンロードする方法について説明します。

- 5 ページの「プロダクトノート」
- 5 ページの「関連ドキュメント」
- 6 ページの「フィードバック」
- 6 ページの「サポートとアクセシビリティ」

プロダクトノート

この製品に関する最新の情報と既知の問題については、次の場所にあるプロダクトノートを参照してください。

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=NetraBladeX3-2B>

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Netra Blade X3-2B	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=NetraBladeX3-2B
Sun Netra 6000 モジュラーシステム	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=Netra6000
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31
Oracle Hardware Management Pack	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp

フィードバック

このドキュメントについてのフィードバックをお寄せください。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた電子的なサポートへのアクセス	http://support.oracle.com 聴覚障害の方へ: http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについて	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html
トレーニングに関する情報	http://education.oracle.com

ブレードの機能とコンポーネント

このセクションでは、Oracle の Netra Blade X3-2B の機能と製品仕様の概要について説明します。

タスク	リンク
ブレードの機能を確認します。	7 ページの「ブレードの機能」
フロントパネルの各機能の位置を確認します。	9 ページの「ブレードのフロントパネルの機能」
背面パネルの各機能の位置を確認します。	11 ページの「ブレードの背面パネルの機能」
UEFI BIOS について説明します。	12 ページの「UEFI BIOS」
製品仕様を確認します。	12 ページの「仕様」

ブレードの機能

機能	説明
シャーシの互換性	<p>Sun Netra 6000 モジュラーシステムと PCIe 2.0 ミッドプレーン (モデル A90-B と A90-D では標準)。</p> <p>各シャーシに対応する Oracle ILOM CMM ファームウェアの最小バージョン:</p> <ul style="list-style-type: none">■ A90-B: CMM ILOM 3.0.12.11b (ソフトウェアリリース 3.3.3)■ A90-D: CMM ILOM 3.1 (ソフトウェアリリース 4.2)
シャーシミッドプレーンおよび内蔵 I/O	<ul style="list-style-type: none">■ シャーシの PCIe EM スロットに対する、2 個の (x8) PCIe 2.0 バス接続■ REM スロットに対する、1 個の (x8) PCIe 2.0 バス接続■ FEM スロットに対する、2 個の (x8) PCI バス接続。PCIe ポートの速度は FEM ごとに異なります■ FEM に搭載された NEM 用の 10/100/1000/10000 BASET Ethernet ポート 2 つ

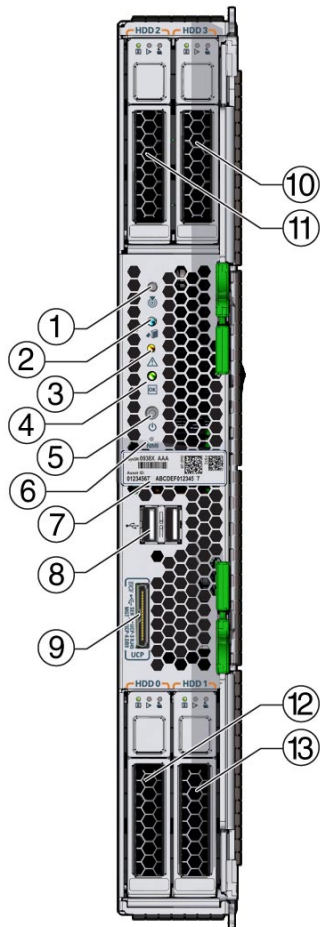
機能	説明
CPU	2つのCPU (Intel Xeon E5-2658、8コア、2.1GHz、20Mバイトキャッシュ、8.0 GT/s QPI、Turbo Boost、95W、ヒートシンク付き)をサポートします。
背面 I/O	ブレード背面のデュアル内蔵 USB ドライブポート。大半のブレードでは、ポート 0 の USB ドライブに Oracle System Assistant がインストールされます。ポートの制限事項と OSA の設定に関する重要な情報については、51 ページの「ソフトウェアとファームウェアの設定」を参照してください。
フロントパネル I/O	1つのユニバーサルコネクタポート (UCP) をマルチポート (ドングル) ケーブルで使用できます。マルチポートケーブルは、次のインタフェース接続を提供します。 <ul style="list-style-type: none">■ VGA グラフィックスポート■ RJ-45 シリアル管理ポート■ デュアル USB ポート (キーボード、マウス、USB ドライブ) フロントパネルには、USB 2.0 ポートが、前面に2つ、内部に2つあります。
メモリー	全部で24個 (CPU ごとに12スロット) の ECC メモリースロット付きレジスタード DDR3 DIMM。サポートされているメモリーの詳細は、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』を参照してください。
Network Express Module (NEM) 互換	10 GbE と 1 GbE の両方の NEM インタフェースがサポートされています。 サポートされている NEM の詳細は、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』を参照してください。
オペレーティングシステム	オプションで、Oracle Solaris をブレードにプリインストールできます。Oracle Solaris、Linux、Windows などのオペレーティングシステムがサポートされています。ブレードでサポートされている OS バージョンの完全なリストについては、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』を参照してください。
仮想化ソフトウェア	Oracle VM ソフトウェアがサポートされており、ブレードにオプションでプリインストールできます。ブレードでは、VMware ESXi もサポートされています。サポートされているバージョンについては、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』を参照してください。

機能	説明
サービスプロセッサ (SP)	<p>AST2300 SP は、IPMI 2.0 準拠のリモート管理機能を提供します。SP の機能は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM バージョン 3.1) ■ シリアル接続を使用したローカル Oracle ILOM コマンド行アクセス ■ ミッドプレーンへの 10/100 管理 Ethernet ポート ■ IP 経由のリモートのキーボード、ビデオ、マウス、およびストレージ (KVMS)
ストレージ	<ul style="list-style-type: none"> ■ SAS/SATA 2.5 インチディスクベイ x 4。サポートされているハードドライブの詳細は、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』を参照してください。 ■ 内蔵 USB 2.0 ポート x 2。シャーシからブレードを取り外すとアクセスできます。 ■ フロントパネル USB 2.0 ポート x 2。 ■ 次の 2 つのオプションの LSI REM ホストバスアダプタがサポートされています。 Sun Storage 6Gb/s SAS REM HBA (SGX-SAS6-REM-Z) Sun Storage RAID 6Gb/s SAS RAID REM HBA (SGX-SAS6-R-REM-Z) <p>詳細は、59 ページの「オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備」を参照してください。</p>
ビデオ	<p>8M バイトのビデオメモリーで最大 1280x1024 の解像度がサポートされます。</p>

関連情報

-
- 12 ページの「仕様」
- 9 ページの「ブレードのフロントパネルの機能」
- 11 ページの「ブレードの背面パネルの機能」

ブレードのフロントパネルの機能



-
- | | |
|---|--|
| 1 | 位置特定 LED (白)。ボタンを押してブレードを識別します。 |
| 2 | 取り外し可能 LED (青)。主電源が切断されています。 |
| 3 | 保守要求 LED (オレンジ色)。障害状態が発生しました。 |
| 4 | OK/電源 LED (緑)。モード: <ul style="list-style-type: none">■ SP ブート - 高速点滅 (0.125 秒オン、0.125 秒オフ)。■ スタンバイ電源 - 点滅 (0.1 秒オン、2.9 秒オフ)。■ ホストブート - ゆっくり点滅 (0.5 秒オン、0.5 秒オフ)。■ 全電力 - 常時点灯。 |
-

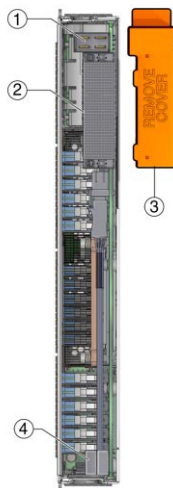
5	電源ボタン。短く押すと、ブレードのスタンバイ電源と全電力が切り替わり ます。 注意-ブレードが全電力モードのときに電源ボタンを4秒以上押し続けると、 即時停止が開始され、スタンバイ電源モードになります。データ損失が発生する 可能性があります。
6	NMI ボタン (Oracle 保守専用)。
7	シリアル番号ラベル。
8	USB 2.0 ポート x 2。
9	ユニバーサルコネクタポート (UCP)。マルチポート (ドングル) ケーブルに使用し ます。
10、11、12、13	ハードドライブ (HDD)。

関連情報

- [11 ページの「ブレードの背面パネルの機能」](#)
- [7 ページの「ブレードの機能」](#)
- [12 ページの「仕様」](#)

ブレードの背面パネルの機能

次の図に、ブレードの背面パネルの機能を示します。



1	電源コネクタ	3	I/O コネクタ
2	背面コネクタカバー (取り外し)	4	USB フラッシュドライブ 2、3

UEFI BIOS

Netra Blade X3-2B には、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) 準拠の BIOS が組み込まれており、旧バージョンの BIOS に比べて豊富なブートオプションとアダプタカードの構成機能を備えています。

また、UEFI ドライバが組み込まれていないソフトウェアやアダプタ用にレガシーバージョンの BIOS も用意されています。デフォルトの設定は、レガシーバージョンです。

UEFI BIOS の詳細は、『Netra Blade X3-2B 管理ガイド』を参照してください。

仕様

次のトピックでは、ブレードの寸法、電気、および環境の仕様について説明します。

ブレードの寸法

仕様	値
高さ	12.87 インチ (327 mm)
幅	1.69 インチ (43 mm)
奥行	19.6 インチ (497 mm)
重量	20 ポンド (9kg)

電氣的仕様

仕様	値
電圧 (公称)	シャーシのバックプレーンから 12 V メイン シャーシのバックプレーンから 3.3 V AUX
電力 (最大)	604 W (最大動作電力)

注 - Oracle ILOM を使用すると、シャーシとブレードの電力を監視することもできます。詳細は、次の場所にある Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>

環境仕様

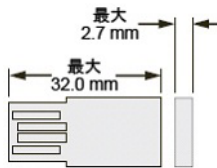
仕様	値
動作時の温度	5 - 45° C
動作時の湿度	5 - 85% (結露なし) 5 - 90% (NEBS 短期間)
動作時の高度	35° C で最高 4000 m、45° C で最高 1800 m
非動作時の温度 (保管時)	-40 - 70° C
非動作時の湿度	93% (結露なし、最大 40° C)

内蔵 USB ポート

ブレードには内蔵 USB ポートが 2 基搭載されています。

内蔵 USB ポートのうち 1 基には、Oracle System Assistant が格納された USB ドライブが事前に取り付けられていることがあります。Oracle System Assistant の詳細は、『Netra Blade X3-2B 管理ガイド』を参照してください。

標準 USB 2.0 インタフェースの USB フラッシュドライブは、サードパーティーから入手できます。次の図に示すように、USB フラッシュドライブは、幅 2.7 mm x 長さ 32.0 mm 以内である必要があります。



注意 - このサイズより大きな USB デバイスを使用すると、USB ポートを破損する可能性があります。

関連情報

-
- [7 ページの「ブレードの機能」](#)
- [9 ページの「ブレードのフロントパネルの機能」](#)
- [11 ページの「ブレードの背面パネルの機能」](#)

ブレードの取り付け

このセクションでは、Sun Netra 6000 モジュラーシステムシャーシへのブレードの取り付けに関連するタスクについて説明します。

- 15 ページの「取り付けの概要」
- 16 ページの「ブレードの取り付け準備」
- 16 ページの「出荷目録一覧」
- 17 ページの「ESD と安全対策」
- 18 ページの「追加コンポーネント」
- 19 ページの「シャーシの準備」
- 19 ページの「ブレードを取り付ける」

取り付けの概要

次の表に、Netra Blade X3-2B の取り付けを完了するために必要なタスクの一覧を示します。

手順	説明	リンク
1	ブレードの機能を確認します。	7 ページの「ブレードの機能とコンポーネント」
2	取り付けの準備を行います。	16 ページの「ブレードの取り付け準備」
3	ブレードをモジュラーシステムシャーシに取り付けます。	19 ページの「ブレードを取り付ける」
4	ブレードの配線を行います。	23 ページの「ブレードの配線」
5	Oracle ILOM を設定します。	29 ページの「Oracle ILOM への接続」
6	システムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	51 ページの「ソフトウェアとファームウェアの設定」
7	OS をインストールするためのストレージドライブを準備します。	59 ページの「オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備」

手順	説明	リンク
8	インストール済みの OS を構成します。	69 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」 77 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」
9	インストールの問題をトラブルシューティングします。	85 ページの「インストールに関する問題のトラブルシューティング」

ブレードの取り付け準備

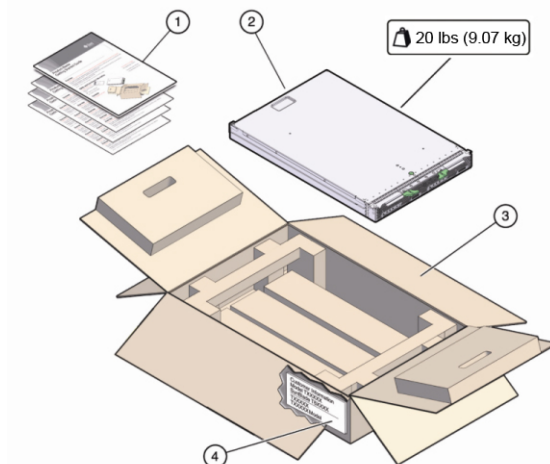
ブレードを取り付ける前に、次の情報を確認します。

タスク	リンク
ブレード出荷キットの内容を確認します。	16 ページの「出荷目録一覧」
ESD および安全性に関する注意事項を確認します。	17 ページの「ESD と安全対策」
追加コンポーネントを取り付けます。	18 ページの「追加コンポーネント」
シャーシを準備します。	19 ページの「シャーシの準備」

出荷目録一覧

ブレードの標準構成は、工場では組み立てられ、Sun Netra 6000 シリーズシャーシに取り付け可能な状態で出荷されます。

梱包箱に含まれる標準のブレードコンポーネントは、次のとおりです。



図の凡例	説明
1	ドキュメント
2	ブレード
3	箱
4	顧客情報シート

関連情報

- 92 ページの「システムのシリアル番号の確認」
- 18 ページの「追加コンポーネント」

ESD と安全対策

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。



注意 - システムが損傷する可能性があります。次の ESD 対策を実施して電子部品を静電気損傷から保護してください。静電気損傷が発生すると、システムが永久に使用不能になったり、保守担当者による修理が必要になったりすることがあります。

- コンポーネントは、静電気防止用マット、静電気防止バッグ、使い捨て静電気防止マットなどの静電気防止面の上に置きます。
- システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

ブレードを取り付ける前に、『Netra Blade X3-2B Safety and Compliance Guide』の安全に関する情報に目を通してください。

注- このブレードは、Reduction of Hazardous Substances (RoHS) 指令に完全に準拠しています。

関連情報

- 18 ページの「追加コンポーネント」
- 19 ページの「ブレードを取り付ける」

追加コンポーネント

標準構成とは別に購入したオプションのブレードコンポーネントは、別に出荷されます。オプションコンポーネントの取り付けは、ほとんどの場合、ブレードをシャーシに取り付ける前に行う必要があります。

次のオプションのブレードコンポーネントを注文および別途購入できます。

- DDR3 DIMM メモリーキット
- SAS ストレージドライブ
- マルチポート (またはドングル) ケーブル
- ファブリック拡張モジュール (FEM)
- RAID 拡張モジュール (REM)
- オペレーティングシステムソフトウェア

サポートされるコンポーネントとそのパーツ番号は、将来通知なしに変更される可能性があります。最新の一覧については、次を参照してください。 https://support.oracle.com/handbook_private/

注- このサイトにアクセスするには、Oracle Web アカウントが必要です。

ブレードの名前とモデルをクリックします。表示されたブレードの製品ページで、「Full Components List」をクリックしてコンポーネントの一覧を表示します。

上部カバーの保守用ラベル、または『Netra Blade X3-2B サービスマニュアル』のコンポーネント取り付け手順を参照してください。

関連情報

- 17 ページの「ESD と安全対策」
- 19 ページの「ブレードを取り付ける」

シャーシの準備

Sun Netra 6000 モジュラーシステムシャーシには4つのモデルがあります。2つはACで、あとの2つはDCです。ブレードを取り付けるモジュラーシステムシャーシが、サポートされているハードウェアとファームウェアで動作し、障害がないことを確認します。次を確認してください。

- ✓ シャーシのミッドプレーンがPCIe 2.0(モデル N6000-ACまたは N6000-DCでは標準)をサポートしていること。ミッドプレーンのバージョン確認方法に関する最新情報については、『Sun Netra 6000 モジュラーシステムご使用にあたって』を参照してください。
- ✓ シャーシ監視モジュール(CMM)では、少なくとも、シャーシモデルと対応する最小ファームウェアバージョンが次のように規定されています。
 - A90-B: CMM ILOM 3.0.12.11b(ソフトウェアリリース 3.3.3)
 - A90-D: CMM ILOM 3.1(ソフトウェアリリース 4.2)
- ✓ シャーシに必要なすべての電源ケーブルとデータケーブルが接続されていること。
- ✓ 使用しているブレードでサポートされている network express module (NEM) がシャーシに取り付けられており、問題なく動作していること。サポートされているNEMの詳細は、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』を参照してください。

シャーシコンポーネントの取り付け、シャーシへのケーブルの接続、シャーシの電源投入については、次の場所にある Sun Netra 6000 モジュラーシステムのドキュメントを参照してください。 <http://docs.oracle.com/cd/E19938-01/>

関連情報

- 19 ページの「ブレードを取り付ける」

▼ ブレードを取り付ける

始める前に 16 ページの「ブレードの取り付け準備」に記載されているすべての手順を実行し、すべての要件を満たします。

- 1 シャーシ内で空いているブレードスロットを見つけ、スロットフィルターパネルを外します。

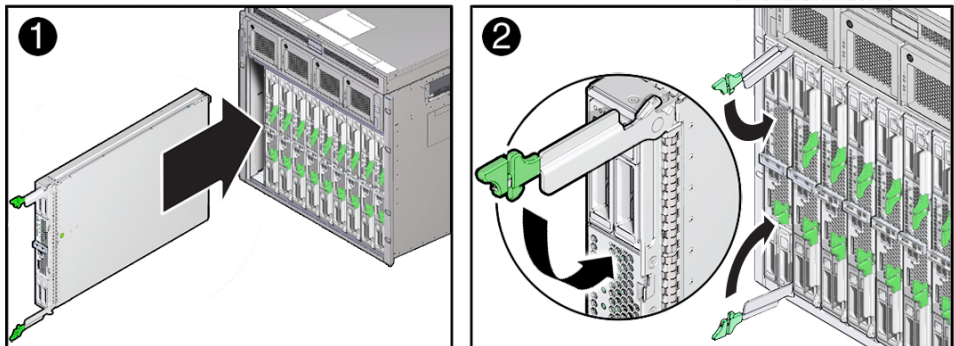
取り外しアームハンドルの両端をつまんでロックを外し、レバーをオープン位置まで外側に回転させて、フィルターパネルを取り出します。

フィルターパネルはあとで使用するので保管しておきます。



注意-ブレードをスロットに取り付けない場合は、スロットのフィルターパネルを取り外さないでください。スロットのフィルターパネルは、電磁妨害 (EMI) に関する FCC の標準を満たすために必要です。空のスロットがあるシャーシを 60 秒以上動作させないでください。シャーシが停止する可能性を少なくするため、空のスロットには必ずフィルターパネルを挿入してください。

- 2 ブレードから背面コネクタカバーを取り外します。
背面コネクタカバーの位置については、11 ページの「ブレードの背面パネルの機能」を参照してください。
- 3 両方のブレード取り外しレバーを開き、取り外しレバーが右側にくるようにブレードを垂直に置きます。
- 4 次のようにしてブレードを取り付けます。
 - a. ブレードをスロットに止まるまで押し込み、シャーシ前面と同じ高さになるようにします (1 を参照)。
 - b. ブレードをシャーシに固定します。上下の取り外しレバーが所定の位置にくるまで、上の取り外しレバーを下向きに回転させ、下部の取り外しレバーを上向きに回転させます (2 を参照)。
これで、ブレードがシャーシに固定されます。



- 5 ブレードの LED が正しく点灯していることを確認します。
ブレードを電源の入っているシャーシに取り付けると、ブレードの SP がシャーシ電源装置のスタンバイ電源を使用して自動的にブートします。ブレードのフロントパネルインジケータは、次のように点灯します。

- ブレードを装着すると、4つのブレードLEDがすべて3回点滅します。これは、ブレードに電源が投入され、SPのブートプロセスが開始されたことを示します。
- 緑色のOK/電源LEDがすばやく点滅します。これは、SPがブート中であることを示します(0.125秒オン、0.125秒オフ)。
- SPがブートサイクルを完了すると、緑色のOK/電源LEDが3秒ごとにすばやく点滅し、ブレードがスタンバイ電源モードであることを示します。

ヒント-フロントパネルのLEDについては、[9ページ](#)の「ブレードのフロントパネルの機能」を参照してください。ブレードのインジケータ、ブレードの取り外し、電源投入手順、およびフロントパネルのケーブル接続の詳細は、『Netra Blade X3-2B サービスマニュアル』を参照してください。

参考 次の手順

- [23ページ](#)の「ブレードの配線」
- [51ページ](#)の「ソフトウェアとファームウェアの設定」
- [29ページ](#)の「Oracle ILOM への接続」

ブレードの配線

このセクションでは、ブレードの配線手順を示します。

選択する配線オプションは、ブレードの設定方法およびシャーシに取り付ける追加モジュールによって異なります。

注-このセクションで説明する手順では、シャーシに取り付けられ、シャーシのミッドプレーンを介してブレードに接続された PCIe Express Modules (PCIe EM) や ネットワーク Express Module (NEM) の配線については対象外とします。これらのモジュールの配線手順については、シャーシ、PCIe EM、または NEM のドキュメントを参照してください。

次の表に、従うべき配線手順の決定方法を示します。

作業内容	リンク
Oracle System Assistant を使用してローカルでブレードを設定します。	24 ページの「3 ケーブルドングルをブレードに接続する」 25 ページの「VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する」 26 ページの「キーボードおよびマウスをドングルまたはブレードに接続する」
シリアル(ローカル)接続された Oracle ILOM を使用してブレードを設定または管理します。	24 ページの「3 ケーブルドングルをブレードに接続する」 27 ページの「シリアルデバイスをドングルに接続する」
ネットワーク(リモート)接続された Oracle ILOM を使用してブレードを設定または管理します。	27 ページの「CMM NET MGT ポートにケーブルを接続する」

関連情報

- [29 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)

▼ 3 ケーブルドングルをブレードに接続する

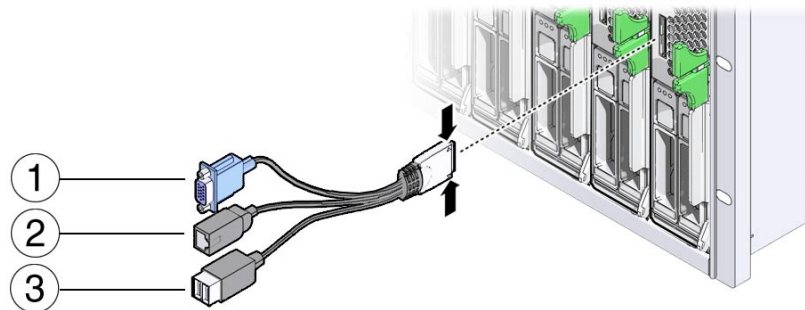
システムシャーシには次のドングルケーブルが付属しています。このケーブルにより、Netra Blade X3-2B に通信デバイスを直接接続できます。

3-Cable Dongle II (パート番号 X4622A-N)

このケーブルには、VGA コネクタ、RJ-45 シリアルコネクタ、1つのデュアル USB コネクタが付いています。

注 - 3-Cable Dongle II は、通常、各 Sun Netra 6000 シリーズのシャーシに付属しています。ケーブルを追加注文することもできます。

- 1 ドングルのユニバーサルコネクタポート (UCP) コネクタをブレードの UCP ポートに接続します。



ラベル	コネクタ
1	VGA ビデオコネクタ
2	RJ45 シリアルコネクタ
3	USB コネクタ x2

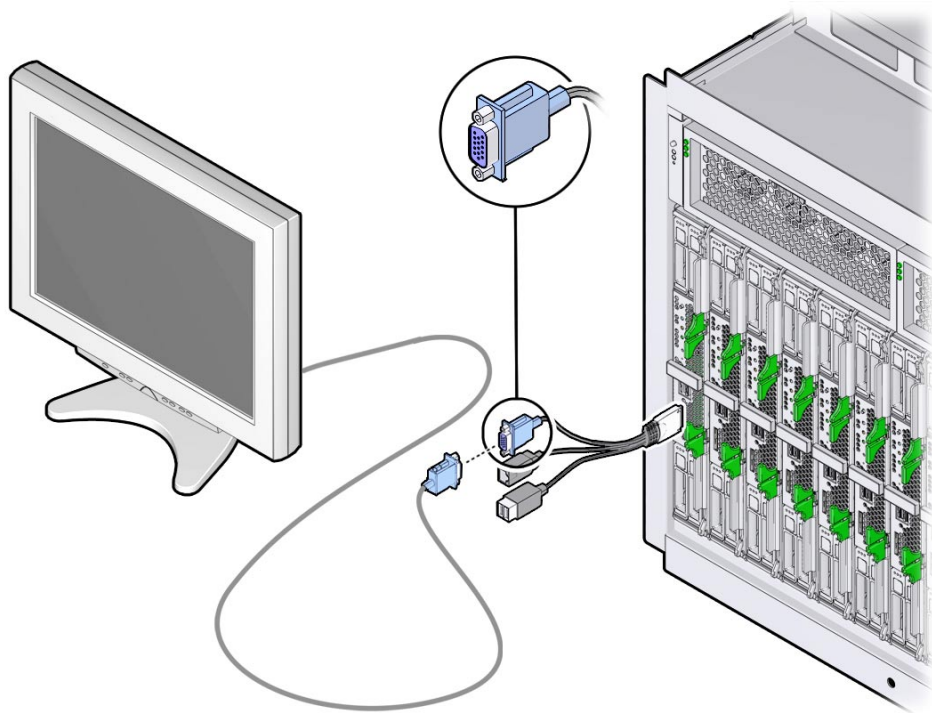
- 2 次の各セクションで説明するとおり、ドングルの各コネクタを必要に応じてデバイスに接続します。
 - [25 ページの「VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する」](#)
 - [26 ページの「キーボードおよびマウスをドングルまたはブレードに接続する」](#)
 - [27 ページの「シリアルデバイスをドングルに接続する」](#)



注意-ケーブルまたはコネクタは破損する可能性があります。ドングルケーブルは構成と保守の目的に使用します。構成または保守の操作が終了したら、ケーブルまたはコネクタの損傷を防ぐため、ドングルケーブルをブレードから取り外します。

▼ VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する

- 1 ブレードのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (UCP) にドングルケーブルを差し込みます。24 ページの「3 ケーブルドングルをブレードに接続する」を参照してください。
- 2 VGA モニターケーブルをドングルのビデオコネクタに接続します。

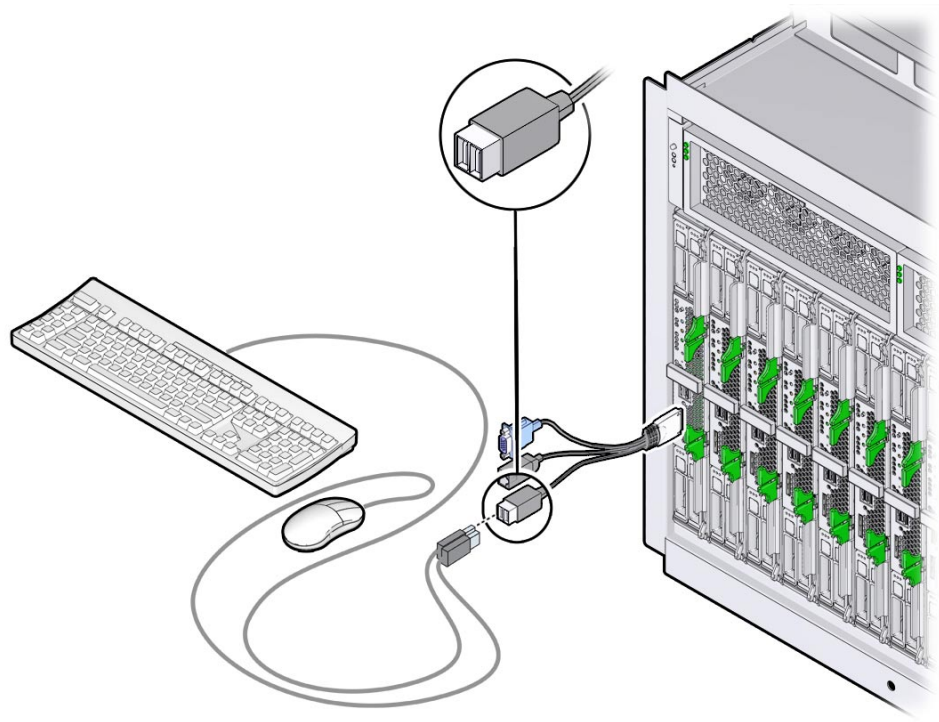


参考 関連情報

- 24 ページの「3 ケーブルドングルをブレードに接続する」
- 26 ページの「キーボードおよびマウスをドングルまたはブレードに接続する」
- 27 ページの「シリアルデバイスをドングルに接続する」

▼ キーボードおよびマウスを dongle または ブレードに接続する

- 1 ブレードのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (UCP) に dongle ケーブルを差し込みます。24 ページの「3 ケーブル dongle をブレードに接続する」を参照してください。
- 2 キーボードおよびマウスを dongle または ブレードフロントパネルの USB コネクタに接続します。

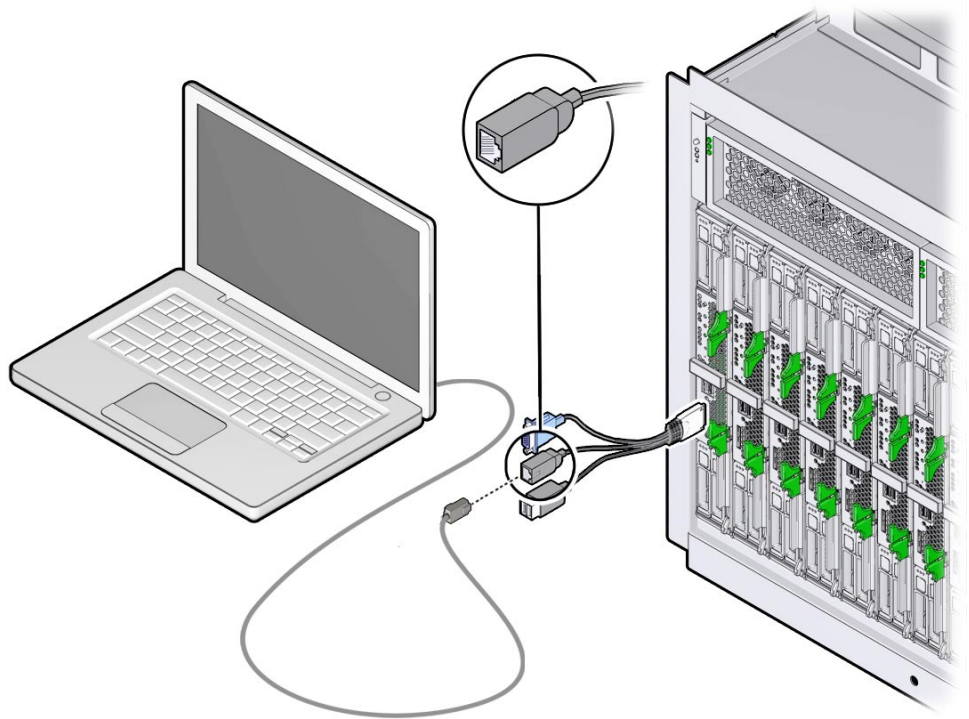


参考 関連情報

- 24 ページの「3 ケーブル dongle をブレードに接続する」
- 25 ページの「VGA モニターを dongle ビデオコネクタに接続する」
- 27 ページの「シリアルデバイスを dongle に接続する」

▼ シリアルデバイスを dongle に接続する

- 1 ブレードのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (UCP) に dongle ケーブルを差し込みます。24 ページの「3 ケーブル dongle をブレードに接続する」を参照してください。
- 2 端末デバイスまたは端末エミュレータのケーブルを dongle の SER MGT ポートに接続します。



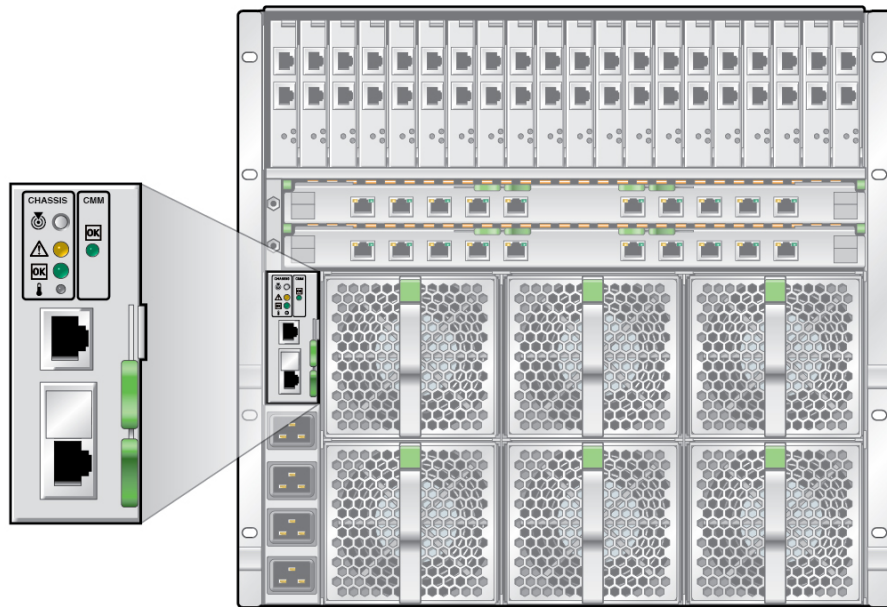
参考 関連情報

- 24 ページの「3 ケーブル dongle をブレードに接続する」
- 25 ページの「VGA モニターを dongle ビデオコネクタに接続する」
- 26 ページの「キーボードおよびマウスを dongle またはブレードに接続する」

▼ CMM NET MGT ポートにケーブルを接続する

- 1 シャーシ CMM の NET MGT 0 の場所を確認します。

- インターネットに接続されている **Ethernet** ケーブルを **CMM NET MGT 0** ポートに接続します。



参考 関連情報

- [29 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)

Oracle ILOM への接続

このセクションでは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にアクセスし、使用しているブレードでサービスプロセッサ (SP) のネットワーク構成を設定する方法を説明します。

次の表に、Oracle ILOM 設定タスクの情報を示します。

タスク	リンク
ブレードでの Oracle ILOM の使用について説明します。	29 ページの「 Oracle ILOM の概要 」
Oracle ILOM CMM にログインして、SP の IP アドレスを取得します。	35 ページの「 Oracle ILOM SP IP アドレスの特定 」
Oracle ILOM にログインします。	41 ページの「 ブレード SP Oracle ILOM へのログイン 」
オプション: Oracle ILOM を介してホストコンソールにアクセスします。	45 ページの「 Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス 」

Oracle ILOM の概要

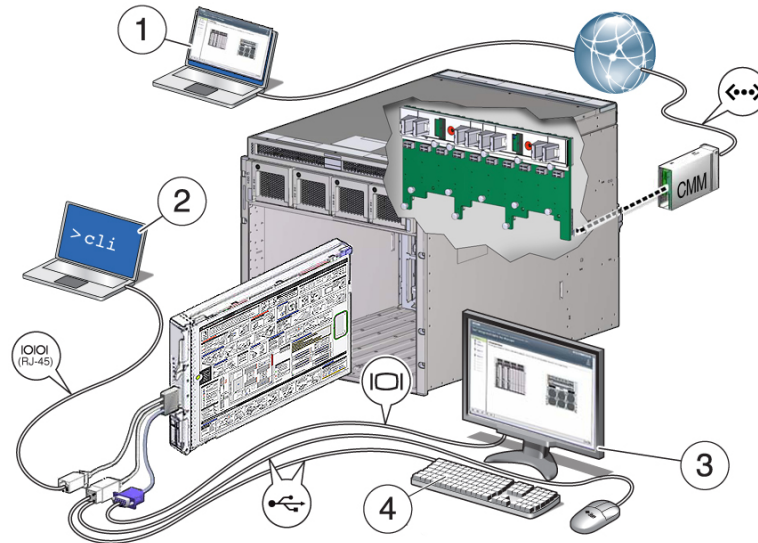
このサーバーは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) バージョン 3.1 以降をサポートしています。Oracle ILOM を使用すると、Netra Blade X3-2B を管理できます。管理は、シャーシ CMM またはブレードのサービスプロセッサを使用して行われます。

次の各セクションで、CMM およびサーバー管理 Oracle ILOM について説明します。

- 30 ページの「[接続オプション](#)」
- 31 ページの「[Oracle ILOM CMM について](#)」
- 33 ページの「[ブレード SP Oracle ILOM について](#)」

接続オプション

次の図と表に、Oracle ILOM に接続して管理タスクを実行するための方法をいくつか示します。



番号	接続元	接続先	説明
1	(Ethernet) CMM NET MGT ポート	使用しているネットワーク	<p>CMM NET MGT ポートをネットワークに接続します。</p> <p>ネットワークから、CMM の IP アドレスを使用して、CMM 上の Oracle ILOM にログインします。ログインすると、個々のブレード SP に移動して、そのブレードを管理できます。</p> <p>CMM CLI または Web インタフェースを使用できます。</p>
2	(シリアル接続) ブレード SP UCP ポート (dongle 必須)	端末デバイス	<p>端末デバイスをブレードに接続されている dongle に接続します。</p> <p>CLI を使用すると、ブレード SP 上の Oracle ILOM にログインできます。</p>

番号	接続元	接続先	説明
3、4	(ローカル KVM 接続) ブレード SP UCP ポート (ドングル必須)	USB キーボードとマウス、および VGA モニター	<p>USB キーボードとマウスをブレード上のドングル、またはフロントパネルの USB コネクタに接続します。VGA モニターは、15 ピンのドングルコネクタに接続します。</p> <p>SP CLI または Web インタフェースを使用すると、ブレード SP 上の Oracle ILOM にログインできます。</p>

Oracle ILOM CMM について

Sun Netra 6000 モジュラーシステムシャーシは、シャーシ監視モジュール (CMM) と呼ばれる専用のサービスプロセッサを備えています。Oracle ILOM CMM は、シャーシを介してブレードのサービスプロセッサに Ethernet 接続を提供します。

各シャーシモデルに対応する Oracle ILOM CMM ファームウェアの最小バージョンは次のとおりです。

- A90-B: CMM ILOM 3.0.12.11b (ソフトウェアリリース 3.3.3)
- A90-D: CMM ILOM 3.1 (ソフトウェアリリース 4.2)

シャーシの特定方法の詳細は、『*Netra Blade X3-2B* プロダクトノート』を参照してください。

Oracle ILOM CMM ソフトウェアを使用すると、取り付けられたサーバーブレードやストレージブレードを含むすべてのシャーシコンポーネントの監視と管理を行うことができます。

Oracle ILOM CMM にログインしたときの Web インタフェースの例を次の図に示します。

ORACLE Integrated Lights Out Manager

Manage: Chassis User: root Role: CMM Hostname: ORACLEGMM-0000000-0000000000

Summary
View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information

Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Serial Number	0000000-0000000000
System Type	Chassis Manager
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.1.0 BIOS: unknown
Primary Operating System	Not Supported
Host Primary MAC Address	Not Supported
ILOM Address	10.153.55.140
ILOM MAC Address	00:21:28:A4:3D:A0

Actions

Power State: ON

Locator Indicator: OFF

System Firmware Update:

Remote Console:

Status

Overall Status: Service Required Total Problem Count: 6

Subsystem	Status	Details	Inventory
Blades	<input checked="" type="checkbox"/> Service Required		Installed Blades (Installed / Maximum): 10 / 10
Power	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Permitted Power Consumption: 12800 watts Actual Power Consumption: 1164 watts	PSUs (Installed / Maximum): 2 / 2
Cooling	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Inlet Air Temperature: 18 °C Exhaust Air Temperature: Not Supported	Fans (Installed / Maximum): 12 / 12
Storage	<input checked="" type="checkbox"/> Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks (Installed / Maximum): 0 / Not Available
I/O Modules	<input checked="" type="checkbox"/> Service Required		Installed NEMs (Installed / Maximum): 1 / 2

Oracle ILOM CMM にログインした状態で、CMM コマンド行インタフェース (CLI) を使用してブレードについての情報を表示する例を次に示します。この例では、ブレードはシャーシブレードのスロット 1 に取り付けられています。

注 - /CH ターゲットは、CMM CLI では、デフォルトで非表示になっています。このターゲットおよびそのサブターゲットを表示するには、次のコマンドを使用します。/CMM/cli legacy_targets=enable

```
-> show /CH/BL1
/CH/BL1
Targets:
  HOST
  System
  SP
Properties:

Commands:
  cd
  show
```

詳細は、次の場所にあるシステムシャーシのドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=sb6000>

関連情報

- 35 ページの「Oracle ILOM SP IP アドレスの特定」
- 41 ページの「ブレード SP Oracle ILOM へのログイン」

ブレード SP Oracle ILOM について

Oracle ILOM ソフトウェアでは、ブレード SP を使用して、次に示すブレードコンポーネントの監視および管理操作を実行できます。

- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示と編集
- 重要なシステム情報の監視と記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

Oracle ILOM SP にログインしたときの Web インタフェースの例を次の図に示します。

ORACLE Integrated Lights Out Manager

Manage: Blade 4 User: root Role: CMM Hostname: ORACLECMM-0000000-0000000000

System Information

- Summary
- Processors
- Memory
- Power
- Cooling
- Storage
- Networking
- I/O Modules
- PCI Devices
- Firmware
- Open Problems (3)
- Remote Control
- Host Management
- System Management
- Power Management
- ILOM Administration

Summary

View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information

Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Serial Number	0000000-0000000000
System Type	Blade
Chassis Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Component Model	Sun Blade X6270 M3
Chassis Address	10.153.55.140
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20011300
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	Not Available
Blade Slot	Slot 4
ILOM Address	0.0.0.0
ILOM MAC Address	00:21:28:DE:43:78

Actions

Power State: OFF

Locator Indicator: OFF

System Firmware Update:

Remote Console:

Status

Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 3

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	✖ Service Required	Processor x86 64-bit	Processors 2 / 2

Oracle ILOM SP にログインした状態で、コマンド行インタフェース (CLI) を使用して、入手可能な情報を表示する例を次に示します。この例では、ブレードとそのシャーシ接続についての情報が示されています。

```
-> show /System
/System
Targets:
  Cooling
  Processors
  Memory
  Power
  Storage
  PCI_Devices
  Firmware
  Networking
  Open_Problems (1)
  BIOS
  IO_Modules
  SP
Properties:
  health = Service Required
  health_details = /SYS (Motherboard) is faulty. Type 'show
                  /System/Open_Problems' for details.
  open_problems_count = 1
  power_state = Off
  locator_indicator = Off
  serial_number = 489089M-1122PR0071
```

```
model = ASSY,BLADE,SUN NETRA X6270 M3
type = Blade
system_fw_version = ILOM: 3.1.0.0  BIOS: 20010900
host_primary_ip_address = (none)
host_primary_mac_address = (none)
system_identifier = (none)
primary_operating_system = (none)
actual_power_consumption = 10 watts
ilom_address = 10.134.210.152
ilom_mac_address = 00:21:28:BB:D7:22
action = (none)
Commands:
  cd
  reset
  show
  start
  stop
```

詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

関連情報

- [35 ページの「Oracle ILOM SP IP アドレスの特定」](#)
- [41 ページの「ブレード SP Oracle ILOM へのログイン」](#)

Oracle ILOM SP IP アドレスの特定

このセクションでは、ブレードの Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) の IP アドレスを取得する方法を説明します。Oracle ILOM CMM を使用してネットワーク経由でブレードにアクセスするには、そのブレードのブレード SP の IP アドレスが必要です。

注 - ログインする際にブレードのシリアル接続しか使用しない場合、SP の IP アドレスは必要ありません。44 ページの「[Oracle ILOM SP CLI へのログイン \(シリアル\)](#)」を参照してください。

ブレード SP の IP アドレスを取得するには、次の各セクションで説明するいずれかの方法を選択します。

- [36 ページの「Oracle ILOM IP アドレスを表示する \(Web\)」](#)
- [39 ページの「Oracle ILOM の IP アドレスを表示する \(CLI\)」](#)

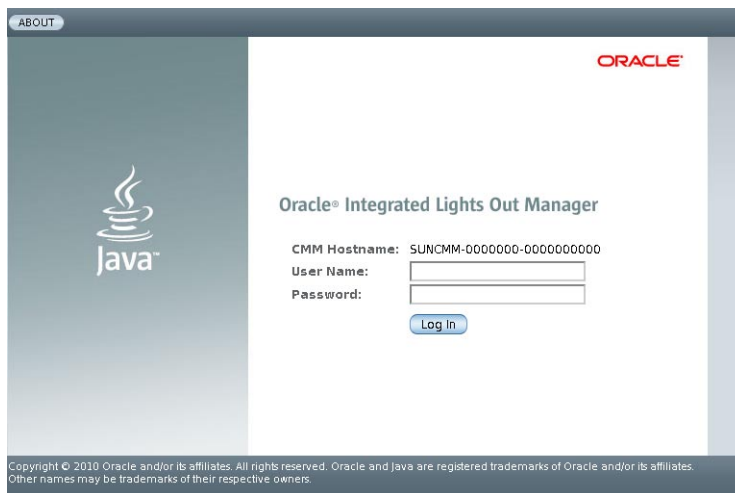
▼ Oracle ILOM IP アドレスを表示する (Web)

ブレードの Oracle ILOM サービスプロセッサのネットワーク構成 (IP アドレスも含む) を表示するには、シャーシの Oracle ILOM CMM を使用する必要があります。この手順では、ブレードの Oracle ILOM が正しく機能しており、Oracle ILOM CMM 経由でアクセス可能かどうかを確認します。

始める前に シャーシの CMM は、Ethernet 管理ポートを使用してネットワークに接続されており、構成済みで動作可能な状態である必要があります。そうでない場合は、続行する前に使用しているシャーシのドキュメントを参照してください。

- 1 ログインするには、Web ブラウザのアドレスフィールドに Oracle ILOM CMM の IP アドレスを入力します (例: `http://10.153.55.140`)。

Web インタフェースの「Login」ページが表示されます。



- 2 ユーザー名とパスワードを入力します。

ヒント-デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- 3 「Log In」をクリックします。
「System Summary」ページが表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager 2 Warnings ABOUT REFRESH LOG OUT

Manage: Chassis User: root Role: CMM Hostname: ORACLECMM-0000000-0000000000

System Information

- Chassis View
- System Information
- Summary**
- Blades
- Power
- Cooling
- Storage
- I/O Modules
- Firmware
- Open Problems (6)
- Remote Control
- Host Management
- System Management
- Power Management
- ILOM Administration

Summary
View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information	
Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Serial Number	0000000-0000000000
System Type	Chassis Manager
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.1.0 BIOS: unknown
Primary Operating System	Not Supported
Host Primary MAC Address	Not Supported
ILOM Address	10.153.55.140
ILOM MAC Address	00:21:28:A4:3D:A0

Actions	
Power State	<input checked="" type="checkbox"/> ON <input type="checkbox"/> OFF <input type="button" value="Turn Off"/>
Locator Indicator	<input type="checkbox"/> OFF <input type="button" value="Turn On"/>
System Firmware Update	<input type="button" value="Update"/>
Remote Console	<input type="button" value="Launch"/>

Status

Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 6

Subsystem	Status	Details	Inventory
Blades	✖ Service Required		Installed Blades (Installed / Maximum): 10 / 10
Power	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Permitted Power Consumption: 12800 watts Actual Power Consumption: 1164 watts	PSUs (Installed / Maximum): 2 / 2
Cooling	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Inlet Air Temperature: 18 °C Exhaust Air Temperature: Not Supported	Fans (Installed / Maximum): 12 / 12
Storage	⚠ Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks (Installed / Maximum): 0 / Not Available
I/O Modules	✖ Service Required		Installed NEMs (Installed / Maximum): 1 / 2


- 4 左上のペインにある「Chassis View」をクリックします。
「Chassis View」ページが表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager

Manage: Chassis User: root Role: CMM Hostname: ORACLECMM-0000000-0000000000

Chassis View

To manage a Blade or Chassis Monitoring Module, select it in the masthead or click on it in the image below.



Chassis Inventory

Component	Name	Part Number	Serial Number
/CH	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM	541-4340-02	0000000-0000000000
/CH/CMM	CMM ORACLECMM-0000000-0000000000	541-4340-02	01111AFC-1044YC18D9
/CH/BL0	SUN BLADE X6270 SERVER MODULE foo	000-0000-00	0000000000
/CH/BL1	SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE ORACLESP-1044FMN00B	4713861-11	1044FMN00B
/CH/BL2	SPARC T3-1B ORACLESP-1115NND2RP	30006053+5+1	1115NND2RP
/CH/BL3	SPARC T3-1B SUNSP-1115NND2TU	30006053+5+	1115NND2TU
/CH/BL4	Sun Blade X6270 M3 ORACLESP-489089M+1135PR00CG	7024015	489089M+1135PR00CG
/CH/BL5	X6270 M2 ORACLESP-0328MSL-1043	5111418	0328MSL-1043
/CH/BL6	ASSY_DISKBLADE_VELA	371-2673-01	0000000-0742QCVC05A
/CH/BL7	Sun Blade X6275 M3 ORACLESP-1001BAC013	1234567-999	1001BAC013

- 表示するシャーシ内のブレードの画像を選択します。
ブレードの「Summary」ページが表示されます。

The screenshot shows the Oracle ILOM interface for Blade 4. The main content area is titled 'Summary' and contains the following sections:

- General Information:** A table listing system details.

Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Serial Number	0000000-0000000000
System Type	Blade
Chassis Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Component Model	Sun Blade X6270 M3
Chassis Address	10.153.55.140
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20011300
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	Not Available
Blade Slot	Slot 4
ILOM Address	0.0.0.0
ILOM MAC Address	00:21:28:DE:43:78
- Actions:** A panel with control buttons for Power State (OFF, Turn On), Locator Indicator (OFF, Turn On), System Firmware Update (Update), and Remote Console (Launch).
- Status:** A section showing 'Overall Status: Service Required' and 'Total Problem Count: 3'. Below it is a table:

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	Service Required	Processor x86 64-bit	Processors 2 / 2

Oracle ILOM SP アドレスは「General Information」の表に「ILOM Address」というラベルで表示されています。

- ブレード SP の IP アドレスをメモします。
ネットワーク経由で直接ブレードの Oracle ILOM にログインするには、ブレード SP の IP アドレスを知る必要があります。ブレード SP の IP アドレスは、DHCP によって構成されます。

参考 次の手順

- 41 ページの「ブレード SP Oracle ILOM へのログイン」

▼ Oracle ILOM の IP アドレスを表示する (CLI)

各ブレードの Oracle ILOM サービスプロセッサのネットワーク構成 (IP アドレスも含む) を表示するには、シャーシの Oracle ILOM CMM を使用する必要があります。

この手順では、ブレードの Oracle ILOM が正しく機能しており、Oracle ILOM CMM 経由でアクセス可能かどうかを確認します。

始める前に シャーシの CMM は、Ethernet 管理ポートを使用してネットワークに接続されており、構成済みで動作可能な状態である必要があります。そうでない場合は、続行する前に使用しているシャーシのドキュメントを参照してください。

- 1 端末ウィンドウを開きます。
- 2 **Secure Shell (SSH)** セッションを使用して、シャーシの **Oracle ILOM CMM** にログインします。

たとえば、次のように入力します。

```
$ ssh username@CMMIPaddress
```

ここで、*username* は管理者権限を持つユーザーアカウント、*CMMIPaddress* は Oracle ILOM CMM の IP アドレスです。

ヒント-デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

Oracle ILOM CMM へのログインに成功すると、Oracle ILOM プロンプト (->) が表示されます。

- 3 次を入力します。

```
-> show /CH/BL0/SP/network
```

ここで、**BL0** は、このシャーシの Netra Blade X3-2B スロット 0 を表します。Oracle ILOM CMM は、ブレードの情報 (IP アドレスと MAC アドレスを含む) を表示します。

ブレード 0 のブレード情報が表示された例を次に示します。

```
-> show /CH/BL0/SP/network
/CH/BL0/SP/network
Targets:
  interconnect
  ipv6
  test
Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  dhcp_server_ip = 10.134.210.11
  ipaddress = 10.134.210.152
  ipdiscovery = dhcp
  ipgateway = 10.134.210.254
  ipnetmask = 255.255.255.0
  macaddress = 00:21:28:BB:D7:22
```



```

managementport = /SYS/SP/NET0
outofbandmacaddress = 00:21:28:BB:D7:22
pendingipaddress = 10.134.210.152
pendingipdiscovery = dhcp
pendingipgateway = 10.134.210.254
pendingipnetmask = 255.255.255.0
pendingmanagementport = /SYS/SP/NET0
sidebandmacaddress = 00:21:28:BB:D7:23
state = enabled
Commands:
  cd
  set
  show
->

```

- 4 ネットワーク構成(ブレードの SP の IP アドレスを含む)をメモします。
ブレードの Oracle ILOM に直接ログインするには、その SP の IP アドレスを知っている必要があります。

ブレード SP の IP アドレスは、デフォルトでは、DHCP によって構成されます。静的 IP アドレスを設定する方法については、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。
- 5 Oracle ILOM CMM からログアウトするには、次のように入力します。
-> **exit**

参考 次の手順

- 41 ページの「ブレード SP Oracle ILOM へのログイン」

ブレード SP Oracle ILOM へのログイン

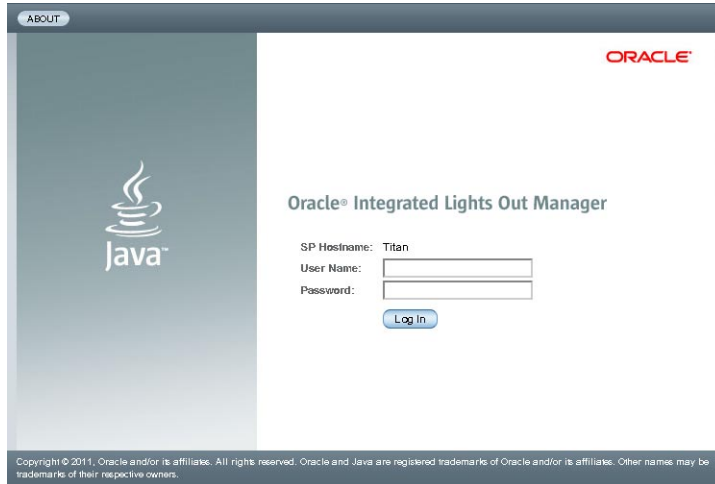
このセクションでは、ブレードのサービスプロセッサ (SP) Oracle ILOM にアクセスするいくつかの方法を説明します。次の各セクションで説明します。

- 41 ページの「Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン (Ethernet)」
- 44 ページの「Oracle ILOM SP CLI へのログイン (Ethernet)」
- 44 ページの「Oracle ILOM SP CLI へのログイン (シリアル)」

▼ Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン (Ethernet)

- 始める前に
- 応答時間を短縮するため、Web ブラウザのプロキシサーバーを使用している場合は無効にしてください。

- ブレードの SP の IP アドレスがわからない場合は、36 ページの「Oracle ILOM IP アドレスを表示する (Web)」を参照し、Oracle ILOM CMM を使用して IP アドレスを特定する方法を確認してください。
- 1 ログインするには、Web ブラウザで、ブレードの Oracle ILOM の IP アドレスを入力します。
Web インタフェースの「Login」ページが表示されます。



- 2 ユーザー名とパスワードを入力します。

ヒント - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- 3 「Log In」をクリックします。
「Summary」ページが表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager
User: root Role: auro SP Hostname: Titan

Summary
View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information

Model	ASSY_BLADE_MENSA
Serial Number	489083M-1122PR0071
System Type	Blade
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20010900
Primary Operating System	-
Host Primary MAC Address	-
Blade Slot	-
ILOM Address	10.134.210.152
ILOM MAC Address	00:21:28:BB:D7:22

Actions

Power State: OFF

Locator Indicator: OFF

Oracle System Assistant Version: 0.0.0.0

System Firmware Update

Remote Console

Status
Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 1

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	✔ OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: 2 Intel Xeon Processor E5 Series	Processors (Installed / Maximum): 2 / 2
Memory	✔ OK	Installed RAM Size: 192 GB	DIMMs (Installed / Maximum): 24 / 24
Power	✔ OK	Permitted Power Consumption: 617 watts Actual Power Consumption: 10 watts	PSUs (Installed / Maximum): 2 / 2
Cooling	✔ OK	Inlet Air Temperature: 20 °C Exhaust Air Temperature: 20 °C	Fans (Installed / Maximum): 12 / 12
Storage	⚠ Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks (Installed / Maximum): 0 / 4
Networking	✔ OK		Installed Ethernet NICs: 2
I/O Modules	✔ OK		Installed FEMs (Installed / Maximum): 2 / 2

これで、ブレードの Oracle ILOM にログインしました。

Oracle ILOM Web インタフェースの使用方法の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントライブラリを参照してください。

参考 次の手順

- 45 ページの「Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス」
- 69 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
- 77 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」

▼ Oracle ILOM SP CLI へのログイン (Ethernet)

始める前に ブレードの SP の IP アドレスがわからない場合は、39 ページの「Oracle ILOM の IP アドレスを表示する (CLI)」を参照し、Oracle ILOM CMM を使用して IP アドレスを特定する方法を確認してください。

- 1 端末ウィンドウを開きます。
- 2 **Secure Shell (SSH)** セッションを使用して、ブレードの **Oracle ILOM SP** にログインします。
たとえば、次のように入力します。

```
$ ssh username@SPIAddress
```

ここで、*username* は管理者特権を持つユーザーアカウントで、*SPIAddress* はブレードサービスプロセッサの IP アドレスです。

ヒント-デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

ブレードの Oracle ILOM へのログインに成功すると、Oracle ILOM プロンプト (->) が表示されます。

CLI インタフェースを使用して Oracle ILOM を構成する方法の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

参考 次の手順

- 45 ページの「Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス」
- 69 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
- 77 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」

▼ Oracle ILOM SP CLI へのログイン (シリアル)

この手順を実行するには、操作員がブレードの近くに実際に居る必要があります。シリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする場合、SP の IP アドレスは必要ありません。

始める前に マルチポートケーブル (dongle と呼ばれる) が必要です。マルチポートケーブルを使用すると、ノードホストまたは SP コンソールに直接接続できます。マルチポートケーブルは、Sun Netra 6000 モジュラーシステムシャーシに標準装備されていることもあります。

- 1 次の各セクションで説明する手順に従ってブレードのケーブルを接続します。
 - a. [24 ページの「3 ケーブルドングルをブレードに接続する」](#)
 - b. [27 ページの「シリアルデバイスをドングルに接続する」](#)
- 2 使用している端末で、次のシリアル通信設定が構成されていることを確認します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー (デフォルト設定 - 変更不可)
 - ハードウェアフロー制御を無効化 (CTS/RTS)
- 3 **Enter** キーを押して、サーバーの **Oracle ILOM** へのシリアルコンソール接続を確立します。
Oracle ILOM のログインプロンプトが表示されます。例:
`SP-productserialnumber login:`
- 4 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM CLI** にログインします。管理者アカウントのユーザー名とパスワードを入力します。

ヒント-デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

Oracle ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

これで、ブレードの Oracle ILOM にログインしました。

CLI インタフェースを使用して Oracle ILOM を構成する方法の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントライブラリを参照してください。

参考 次の手順

- [45 ページの「Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス」](#)

Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス

Oracle ILOM 経由でブレードのホストコンソールに接続すると、実際にホストの前に居るように操作を実行できます。この接続方法は、サーバーの BIOS 設定プログラムへのリモートアクセスが必要な場合や、サーバーに OS やその他のソフトウェアを構成またはインストールする場合に役立ちます。

次のいずれかの方法を選択します。

- Oracle ILOM コマンド行インタフェース経由でシリアルコンソールを使用します。46 ページの「ブレードに接続する (シリアルコンソール)」を参照してください。
- ILOM Web インタフェースのリモートコンソール機能を使用します。47 ページの「ブレードに接続する (リモートコンソール)」を参照してください。

▼ ブレードに接続する (シリアルコンソール)

- 1 管理者権限のあるアカウントを使用して、ブレードの **Oracle ILOM** にログインします。

前述した次のいずれかの方法を使用します。

- 44 ページの「Oracle ILOM SP CLI へのログイン (シリアル)」で説明したとおり、シリアル管理ポートを使用します
- クライアントシステムを使用して、ネットワーク経由で SSH セッションを確立します。44 ページの「Oracle ILOM SP CLI へのログイン (Ethernet)」を参照してください。

- 2 ホストシリアルコンソールにアクセスするには、次のように入力します。

-> **start /HOST/console**

シリアルコンソールの出力が表示されます。

注 - シリアルコンソールが使用中の場合は、**stop /HOST/console** コマンドでコンソールセッションを停止してから、**start /HOST/console** コマンドを入力します。

- 3 **Oracle ILOM** コンソールに戻るには、**ESC** キーのあとに "(" キー (**Shift+9**) を押します。

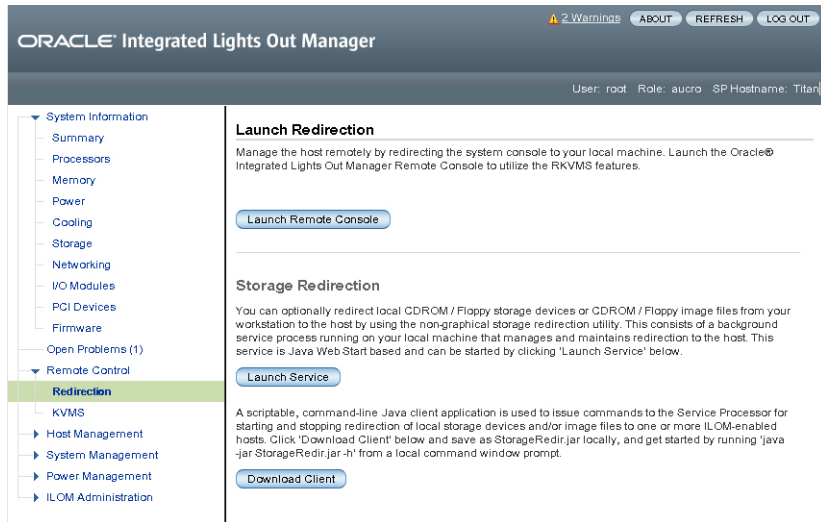
参考 次の手順

- 69 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
- 77 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」

▼ ブレードに接続する (リモートコンソール)

- 始める前に リモートシステムからホストコンソールに接続するには、リモートシステムで次の要件が満たされている必要があります。
- Oracle Solaris、Linux、または Windows などのオペレーティングシステムがインストールされています。
 - CMM の Ethernet 管理ポートにアクセスできるネットワークにシステムが接続されています。
 - Java Runtime Environment (JRE) 1.5 以降がインストールされています。CD-ROM リダイレクションの場合は、32 ビット Java を使用する必要があります。
 - リモートコンソールシステムが Oracle Solaris OS を実行している場合は、物理フロッピーディスクドライブと CD/DVD-ROM ドライブにアクセスするために、リモートコンソールのボリューム管理を無効にします。
 - リモートコンソールシステムが Windows を実行している場合は、Internet Explorer の拡張セキュリティー機能を無効にする必要があります。
 - リモートコンソールシステムと Oracle ILOM のサービスプロセッサが『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 日常的な管理 - Web 手順ガイド』の手順に従って設定されています。
- 1 **Web** ブラウザで、ブレードの **Oracle ILOM** にログインします。
これらの手順は、[41 ページの「Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン \(Ethernet\)」](#)に記載されています。
 - 2 「**Remote Control**」 > 「**Redirection**」をクリックします。
「Launch Redirection」画面が表示されます。

注 - 「Mouse Mode Settings」タブでマウスモードが絶対モードに設定されていることを確認します。



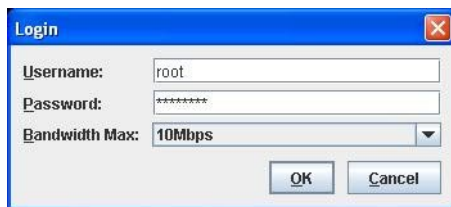
3 「Launch Remote Console」をクリックします。

次の点に注意してください。

- リモートコンソールシステムのリダイレクションに Windows システムを使用している場合、「Launch Remote Console」をクリックしたあとに、「Hostname Mismatch」警告ダイアログボックスが表示されることがあります。その場合、「Yes」ボタンをクリックして消去します。

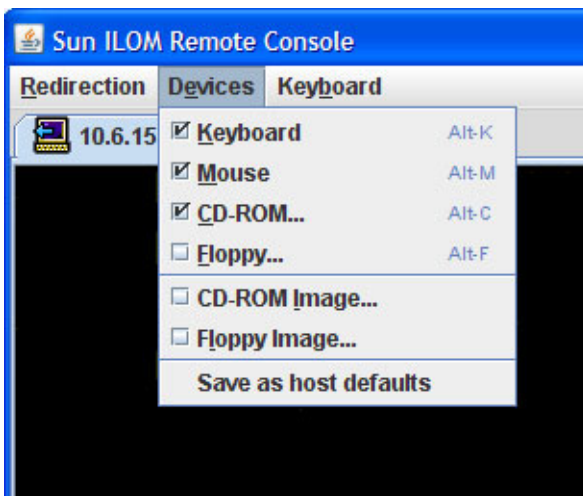


- 「Remote Control」ログインダイアログボックスが表示されることがあります。その場合、ユーザー名とパスワードを再入力して「OK」をクリックします。



JavaRConsole 画面が表示されます。

- 4 リモートシステム上のデバイスをホストコンソールにリダイレクトするために、「Devices」メニューから適切な項目を選択します。



- リモートの物理フロッピーディスク - 「Floppy」を選択すると、リモートシステムに接続された物理フロッピードライブにサーバーがリダイレクトされます。
- リモートフロッピーイメージ - 「Floppy Image」を選択すると、リモートシステム上にあるフロッピーイメージファイルにサーバーがリダイレクトされます。
- リモートの物理 CD/DVD - 「CD-ROM」を選択すると、リモートシステムに接続された CD/DVD ドライブ内の CD/DVD にサーバーがリダイレクトされます。
- リモートの CD/DVD イメージ - 「CD-ROM Image」を選択すると、リモートシステム上にある .iso イメージファイルにサーバーがリダイレクトされます。

注 - いずれかの CD/DVD オプションを使用してサーバー上にソフトウェアをインストールすると、コンテンツへのアクセスがネットワーク経由で行われるため、インストールの所要時間が大幅に増加します。インストールの所要時間は、ネットワークの接続状態とトラフィックによって異なります。

参考 次の手順

- [45 ページの「Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス」](#)
- [69 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」](#)
- [77 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」](#)

ソフトウェアとファームウェアの設定

Oracle System Assistant は、システムのソフトウェアとファームウェアを設定するためのもっとも簡単な方法です。使用しているブレードに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合、あるいは、Oracle ILOM または Hardware Management Pack を使用してシステムを設定する場合、詳細な設定手順については、『Netra Blade X3-2B 管理ガイド』を参照してください。

このセクションでは、次の表に示すとおり、ソフトウェアとファームウェアの設定について説明します。

タスク	リンク
Oracle ILOM から、またはローカルで、Oracle System Assistant を起動します。	51 ページの「Oracle System Assistant へのアクセス」
Oracle System Assistant を使用して一般的な設定タスクを実行します。	56 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)」
オペレーティングシステムとドライバの構成およびインストール用オプションについて説明します。	57 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ」

Oracle System Assistant へのアクセス

Oracle System Assistant (OSA) アプリケーションは、Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うためのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle VM、Linux、または Windows オペレーティングシステムのインストール、ブレードの最新ソフトウェアリリースへの更新、およびブレードハードウェアの構成を行うことができます。

注 - 高入力周囲条件では、OSA ドライブとして使用されている USB ポートは信頼できません。OSA ドライブは、ユーザー領域がなく、OSA によって記述される機能のみを対象としています。背面 USB ポートには、NEBS の最大入力周囲条件に対応する工業用温度定格のデバイスが必要です。現在、Oracle は工業用温度定格の USB ポートを提供していません。

次の手順では、Oracle System Assistant にアクセスするためのさまざまな方法について説明します。

- 52 ページの「[Oracle System Assistant を起動する \(Oracle ILOM\)](#)」
- 54 ページの「[Oracle System Assistant を起動する \(ローカル\)](#)」

▼ Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)

- 1 ブレードがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
ブレードスタンバイモードでは、電源/OK LED がゆっくり点滅します。
- 2 ブレード SP の **Oracle ILOM Web** インタフェースにログインします。
[41 ページの「Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン \(Ethernet\)」](#)を参照してください。

「System Summary」画面が表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager

User: root Role: auroc SPHostname: Titan

Summary

View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information

Model	ASSY,BLADE,MENSA
Serial Number	489089M-1122PR0071
System Type	Blade
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20010900
Primary Operating System	-
Host Primary MAC Address	-
Blade Slot	-
ILOM Address	10.134.210.152
ILOM MAC Address	00:21:28:BB:D7:22

Actions

Power State: OFF

Locator Indicator: OFF

Oracle System Assistant Version: 0.0.0.0

System Firmware Update:

Remote Console:

Status

Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 1

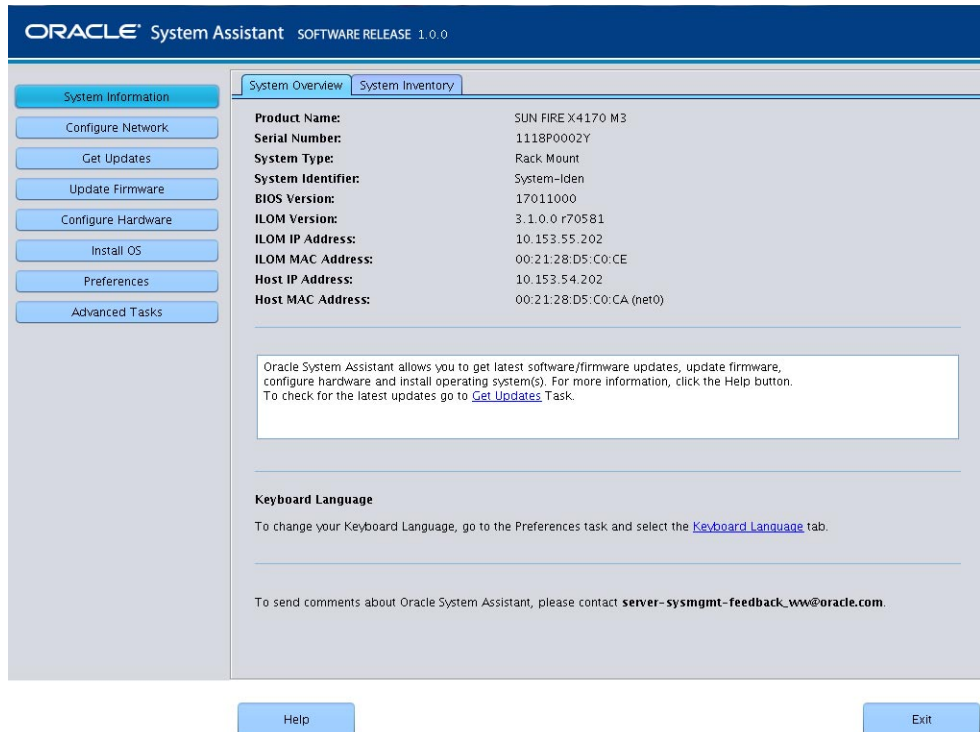
Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	✔ OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: 2 Intel Xeon Processor E5 Series	Processors (Installed / Maximum): 2 / 2
Memory	✔ OK	Installed RAM Size: 192 GB	DIMMs (Installed / Maximum): 24 / 24
Power	✔ OK	Permitted Power Consumption: 617 watts Actual Power Consumption: 10 watts	PSUs (Installed / Maximum): 2 / 2
Cooling	✔ OK	Inlet Air Temperature: 20 °C Exhaust Air Temperature: 20 °C	Fans (Installed / Maximum): 12 / 12
Storage	⚠ Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks (Installed / Maximum): 0 / 4
Networking	✔ OK		Installed Ethernet NICs: 2
IO Modules	✔ OK		Installed FEMs (Installed / Maximum): 2 / 2

Oracle System Assistant の「Launch」ボタンは右上のパネルにあります。

- 3 「Launch」をクリックします。

- 4 **JavaRConsole** セッションを実行するかどうかを尋ねるダイアログで、「Yes」をクリックします。

ブレードの電源が入り、Oracle System Assistant アプリケーションがブートし、アプリケーションのメイン画面が表示されます。



参考 次の手順

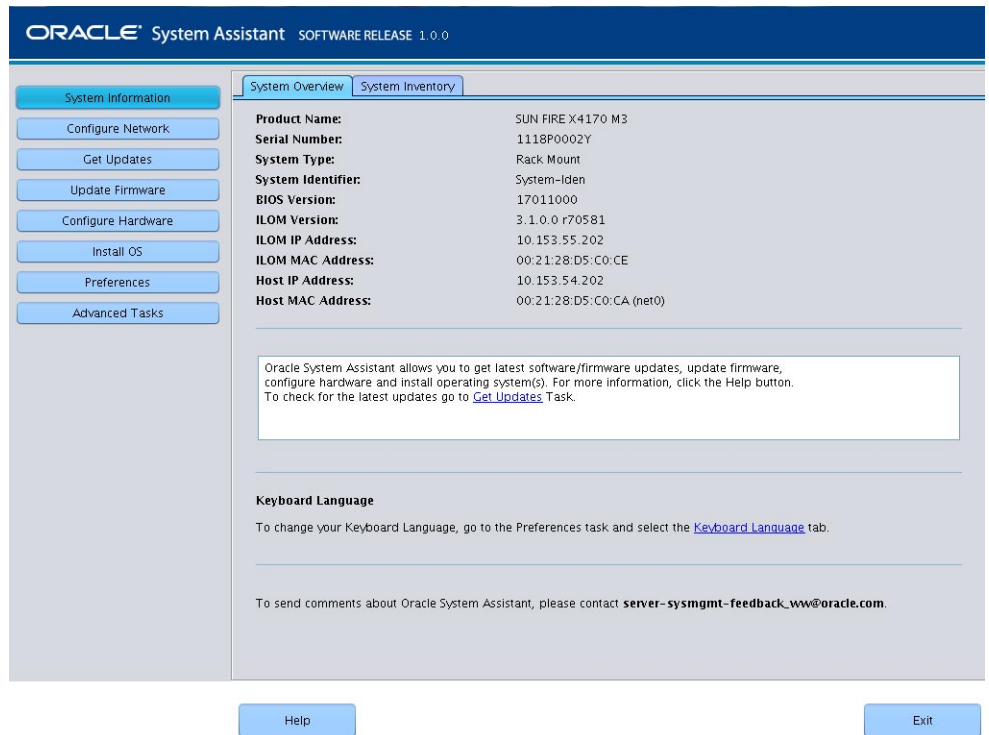
- 56 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)」

▼ Oracle System Assistant を起動する (ローカル)

Oracle System Assistant をローカルで起動するには、操作員がブレードの近くに実際に居て、次に対するアクセス権を保有している必要があります。

- 3 ケーブルドングル
- VGA モニター
- キーボードとマウス

- 1 ブレードがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
サーバースタンバイモードでは、電源/OK LED がゆっくり点滅します。
- 2 次の手順に従ってローカルでブレードに接続します。
 - a. 24 ページの「3 ケーブルドングルをブレードに接続する」
 - b. 25 ページの「VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する」
 - c. 26 ページの「キーボードおよびマウスをドングルまたはブレードに接続する」
- 3 フロントパネルの電源ボタンを押して、ブレードに電力を投入し全電力モードにします。
ブレードがブートし、モニターに POST メッセージが表示されます。
- 4 プロンプトが表示されたら **F9** キーを押します。
Oracle System Assistant アプリケーションがブートし、アプリケーションのメイン画面が表示されます。



参考 次の手順

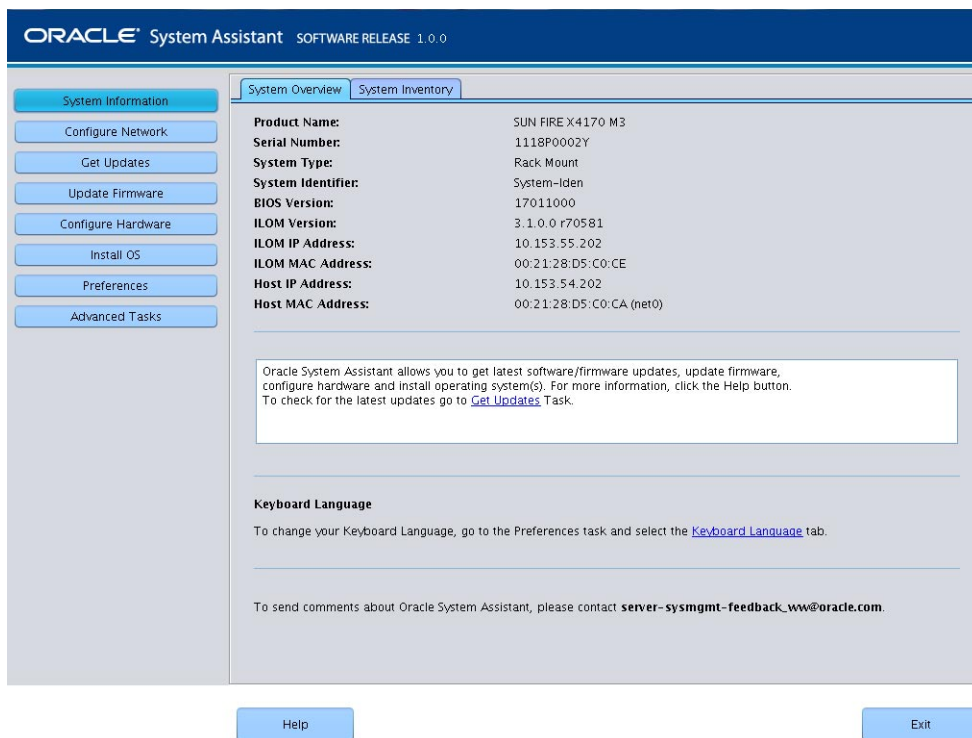
- 56 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)」

▼ ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)

1 次のいずれかの手順に従って **Oracle System Assistant** を起動します。

- 52 ページの「Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)」
- 54 ページの「Oracle System Assistant を起動する (ローカル)」

Oracle System Assistant アプリケーションがブートし、アプリケーションのメイン画面が表示されます。



2 **Oracle System Assistant** アプリケーションを使用して、次の表に示した順番にタスクを実行します。

Oracle System Assistant の使用法の詳細は、『Netra Blade X3-2B 管理ガイド』または Oracle System Assistant 組み込みのヘルプを参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
1	Oracle System Assistant ネットワーク接続を設定します。	Network Configuration
2	最新のソフトウェアとファームウェアのアップデートを入手します。	Get Updates
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクスパンダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。	ファームウェアの更新
4	Oracle ILOM を構成します。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」
5	RAID を構成します。	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」
6	Linux または Windows OS、あるいは Oracle VM ソフトウェアをインストールします。 注-詳細は、57 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ」、またはインストールする OS の OS インストールガイドを参照してください。	Install OS

参考 次の手順

- 57 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ」
- 69 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
- 77 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」

オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ

インストール済みのオペレーティングシステム (OS) を構成するか、使用しているブレードでサポートされている OS をインストールします。次の表に、OS のインストールと構成に関する情報の入手方法を示します。

注-OS をインストールする前に、ストレージドライブを準備する必要があります。59 ページの「オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備」を参照してください。

目的	構成またはインストールする OS	使用するツールまたはドキュメント
インストール済みの OS の構成	Oracle Solaris OS または Oracle VM	次を参照してください。69 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」および 77 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」
OS のインストール	Oracle VM、Windows、または Linux OS Oracle Solaris OS または VMware ESX	Oracle System Assistant OS のインストールガイド
OS ドライバのインストール	サポートされている任意の OS	OS のインストールガイド

関連情報

- [56 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する \(Oracle System Assistant\)」](#)

オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備

ブレード上にオペレーティングシステムをインストールする場合は、Oracle System Assistant を使用してボリュームを作成することによってハードドライブを準備する必要があります。Oracle System Assistant がインストールされていない場合は、LSI BIOS 構成ユーティリティーを使用して手動でドライブを準備します。

OS のインストール後に RAID ボリュームを作成する方法の詳細は、『Netra Blade X3-2B 管理ガイド』を参照してください。

注-インストール済みのオペレーティングシステムを構成する場合は、このセクションを読み飛ばして、使用しているブレード上に事前構成された OS について説明したセクションに進んでください。

このセクションでは、特定の OS 向けにブレードのハードドライブを準備する方法について説明します。

説明	リンク
ブレードでサポートされているホストバスアダプタについて説明します。	59 ページの「サポートされているホストバスアダプタ」
ボリュームを作成し、必要に応じて HBA のブートドライブを設定します。	63 ページの「ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)」
仮想ドライブを SAS6-R-REM-Z HBA からブート可能にします	65 ページの「仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティー)」

サポートされているホストバスアダプタ

次の各セクションでは、ハードドライブを準備する際のオプションについて説明します。使用しているブレードに取り付けられている HBA に対応するセクションに進んでください。

- [60 ページの「SG-SAS6-REM-Z ホストバスアダプタ」](#)
- [61 ページの「SG-SAS6-R-REM-Z ホストバスアダプタ」](#)

SG-SAS6-REM-Z ホストバスアダプタ

ブレードに Sun Storage 6 Gb SAS REM HBA (SG-SAS6-REM-Z) ホストバスアダプタ (HBA) が取り付けられている場合は、このセクションの説明に従って、OS のインストール先ストレージドライブを準備してください。

注- ドライブが SG-SAS6-REM-Z HBA に接続されている場合は、RAID ボリュームを作成しなくても、個々のディスク上にオペレーティングシステムをインストールできます。そうしたディスクは、システム BIOS にブート可能なディスクとして表示されます。ただし、そうしたディスクで RAID ボリュームを作成してからオペレーティングシステムをインストールする場合は、このセクションに示す手順に従ってください。

RAID ボリュームを作成するときは、次のオプションを使用できます。

- 60 ページの「Oracle System Assistant」
- 60 ページの「LSI SAS 2 BIOS 構成ユーティリティ」

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、RAID 0 ボリュームを作成するためのもっとも簡単な方法です。次の表に、Oracle System Assistant が HBA を参照するために使用する名前と、Oracle System Assistant による HBA サポートの内容を示します。

Oracle System Assistant 名	Oracle System Assistant でのサポート
SGXSAS6INTZ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 2 台以上のハードドライブによる RAID 0 をサポートしません ■ ブート可能なドライブの表示または設定はできません ■ ディスク状態 (良/不良/ホットスペア) の表示はできません

63 ページの「ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)」を参照してください。

LSI SAS 2 BIOS 構成ユーティリティ

LSI SAS2 BIOS 構成ユーティリティは HBA ファームウェアにあります。

OS をインストールする前に LSI SAS2 BIOS 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームを作成するのは、次のような場合です。

- ディスクに OS をインストールする前に RAID ボリュームを作成したい。
- ブレードに Oracle System Assistant がインストールされていないか、Oracle System Assistant を使いたくない。

- OS のインストール先ドライブを使用して RAID ポリリュームレベル 1 または 10 を作成したい (Oracle System Assistant は、SG-SAS6-REM-Z については、RAID 0 のみをサポート)。

次の LSI ドキュメントに、LSI SAS2 BIOS 構成ユーティリティを使用してボリュームを作成するための手順が掲載されています。『SAS Integrated RAID Solutions User's Guide』。このドキュメントは、次の場所で入手できます。

http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-rem-z.aspx

SG-SAS6-R-REM-Z ホストバスアダプタ

ブレードに Sun Storage 6 Gb SAS REM RAID HBA (SG-SAS6-R-REM-Z) HBA がインストールされている場合は、このセクションの説明に従って、OS のインストール先ストレージドライブを準備してください。

注 - SG-SAS6-R-REM-Z HBA を使用する場合は、OS をインストールする前にボリュームを作成しなければなりません。システム BIOS は SG-SAS6-R-REM-Z に接続されたドライブを認識しません (ただし、そのドライブがボリュームの一部である場合はこのかぎりではありません)。HBA に 2 つ以上のボリュームが接続されている場合は、OS のインストール先ボリュームをブートデバイスとして設定する必要があります。

ストレージドライブを準備するときは、次のオプションを使用できます。

- 61 ページの「Oracle System Assistant」
- 62 ページの「LSI WebBIOS 構成ユーティリティ」

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、オペレーティングシステムのインストール用ディスクを準備するためのもっとも簡単な方法です。次の表に、Oracle System Assistant が HBA を参照するために使用する名前と、Oracle System Assistant によるサポートの内容を示します。

Oracle System Assistant 名	Oracle System Assistant でのサポート
Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID HBA	<ul style="list-style-type: none"> ■ 1 台以上のハードドライブによる RAID 0、および 2 台以上のハードドライブによる RAID 1 をサポートします ■ ボリュームをブートデバイスとして設定できます ■ ボリュームがブートデバイスかどうかを表示できます ■ ディスクの状態(良、不良、ホットスペア)を表示できます

63 ページの「ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)」を参照してください。

LSI WebBIOS 構成ユーティリティ

LSI WebBIOS 構成ユーティリティは HBA ファームウェアに組み込まれています。

LSI WebBIOS 構成ユーティリティを使用してストレージドライブを準備するのは、次のような場合です。

- ブレードに Oracle System Assistant がインストールされていないか、Oracle System Assistant を使いたくない。
- OS のインストール先ディスクを使用して RAID ボリュームレベル 5、6、10、50、60 を作成したい (Oracle System Assistant は、SAS6-R-REM-Z については、RAID 0 および 1 のみをサポート)。

次に示す、LSI WebBIOS 構成ユーティリティを使用して OS インストール用ストレージドライブを準備するための手順を参照してください。

1. 1 台以上の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成します。

『MegaRAID SAS Software User's Guide』 (Web ページ上のリンクはソフトウェアユーザーガイド) を参照してください。このドキュメントは、次の場所で入手できます。

http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx

2. 2 つ以上の仮想ドライブを作成する場合は、1 つの仮想ドライブをブートボリュームとして選択します。65 ページの「仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティ)」を参照してください。

『MegaRAID SAS Software User's Guide』には、ドライブをブート可能にするための手順は記載されていません。

▼ ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)

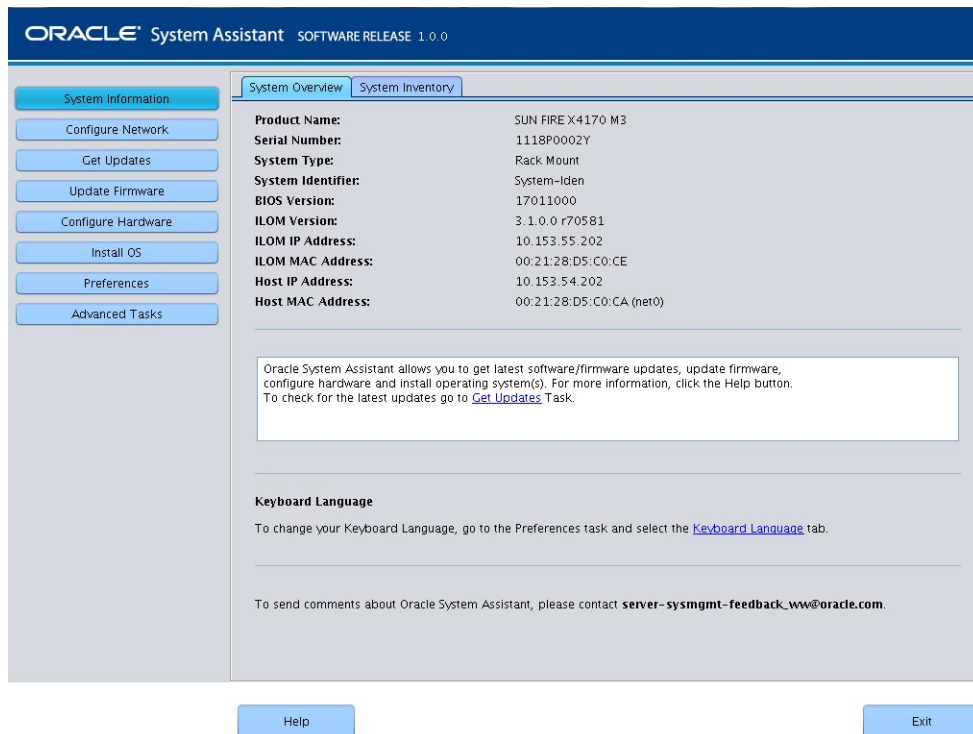
Oracle System Assistant RAID 構成タスクを実行することによって、OS インストール用のブレードのハードドライブを準備できます。このタスクにより、SGXSAS6INTZ の場合は RAID 0、SG-SAS6-R-REM-Z の場合は RAID 0 または 1 を使用してブート可能なボリュームを作成できます。

Oracle System Assistant は、2つのディスクコントローラをサポートしています。RAID 構成はそれぞれで異なります。この手順を使用して、OS インストール用のハードディスクを準備します。

- 始める前に
- インストール方法を設定します。
 - Oracle System Assistant をローカルで実行するための配線方法の詳細は、[23 ページの「ブレードの配線」](#)を参照してください。
 - Oracle ILOM リモートコンソールの設定方法の詳細は、[45 ページの「Oracle ILOM 経由でのブレードコンソールへのアクセス」](#)を参照してください。
 - サポートされる HBA を確認します。(59 ページの「サポートされているホストバスアダプタ」を参照してください。)
- 1 ブレードがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
 - 2 ブレードをブートし、モニターまたはリモートコンソール画面を注視して、**F9** キーを押して **Oracle System Assistant** を起動するように求めるプロンプトが表示されるのを待ちます。

```
Version 2.14.1219. Copyright (C) 2011 American Megatrends, Inc.
BIOS Date: 09/06/2011 12:12:06 Ver: 20011300
Press F2 to run Setup (CTRL+E on serial keyboard)
Press F8 for BBS Popup (CTRL+P on serial keyboard)
Press F12 for network boot (CTRL+N on serial keyboard)
Press F9 to start Oracle System Assistant
```

- 3 プロンプトが表示されたら **F9** キーを押します。
「Oracle System Assistant System Overview」画面が表示されます。



- 4 「**Configure Hardware**」をクリックします。
「Configure Hardware RAID Configuration」画面が表示されます。
- 5 「**HBA**」ドロップダウンリストから、特定のホストバスアダプタ (**HBA**) を選択します。
Netra Blade X3-2B は、次のストレージドライブコントローラをサポートしています。
 - SG-SAS6-REM-Z
 - SG-SAS6-R-REM-Zサポートされている HBA の詳細は、59 ページの「サポートされているホストバスアダプタ」を参照してください。
- 6 **RAID** レベルを選択します。
Oracle System Assistant は、RAID 0 および 1 のみをサポートしています。

- 7 「Available Disks」セクションに表示されたリストから、ボリュームに含めるディスクを選択します。
- 8 「Create Volume」をクリックします。
作成されたボリュームが「Created Volumes」セクションのリストに表示されます。
- 9 「Volume Details」をクリックします。
ボリュームの名前を入力します。
- 10 SG-SAS6-R-REM-Z HBA (Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID HBA) の場合は、ボリュームをブート可能として設定します。
 - 「Created Volumes」セクションで、今作成したボリュームを選択します。
 - 「Set Volume for Boot」をクリックします。

注-SG-SAS6-REM-Z HBA の場合は、ブートディスクを設定する必要はありません。システム BIOS によって自動的にブート可能なディスクとして認識されません。

- 11 次のうち、使用している OS のインストールガイドに示された手順に従って OS をインストールします。
 - 『Netra Blade X3-2B ESX ソフトウェアインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Linux オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Oracle VM オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Windows オペレーティングシステムインストールガイド』

▼ 仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティ)

LSI BIOS 構成ユーティリティを使用して、SG-SAS6-R-REM-Z HBA 上に 2 台以上の仮想ドライブ (RAID ボリューム) を作成した場合は、次の手順に従って 1 つの仮想ドライブをブート可能にします。

次のいずれかに該当する場合は、この手順を実行する必要はありません。

- Oracle System Assistant を使用してボリュームを作成し、ボリュームをブート可能にした場合。
- SG-SAS6-REM-Z HBA が取り付けられている場合。
- LSI BIOS 構成ユーティリティを使用して仮想ドライブを 1 つだけ作成した場合。

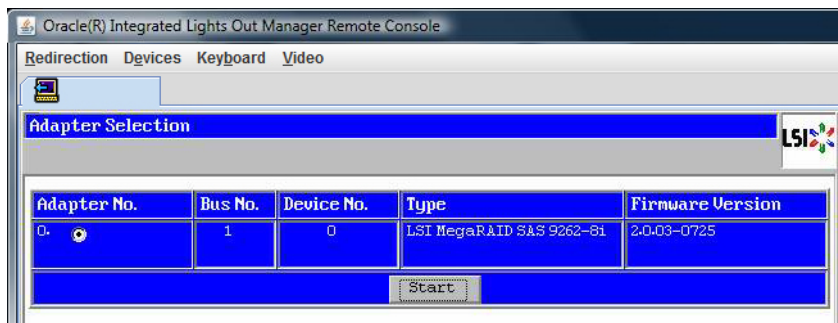
始める前に LSI BIOS 構成ユーティリティを使用して SG-SAS6-R-REM-Z HBA 上に最低 1 つの仮想ドライブを作成します。

- 1 ブレードがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
- 2 LSI SG-SAS6-R-REM-Z HBA BIOS の WebBIOS メインメニューにアクセスします。

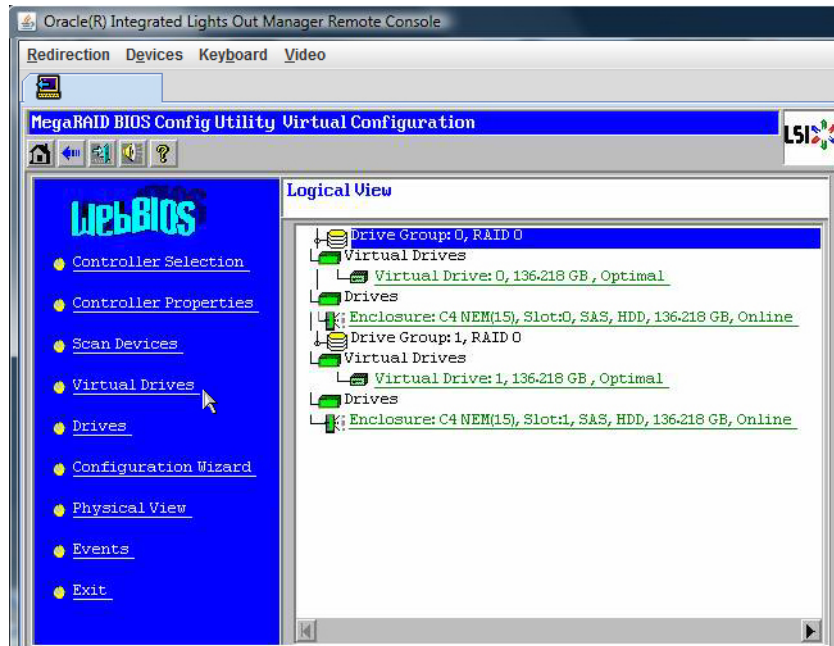
注- 仮想ドライブを作成した直後であれば、すでに WebBIOS 画面が表示されていません。WebBIOS ユーティリティを終了してしまった場合は、手順 2 と手順 3 を実行すると WebBIOS メインメニューが開きます。

- システム BIOS がレガシーモードで実行されている場合:
 - a. システムをブートし、画面に表示されるメッセージを注視して、LSI バナーが表示されるまで待ちます。
 - b. バナーページでプロンプトが表示されたら、**Control+H** キーを押します。
 - システム BIOS が UEFI モードで実行されている場合は、システム BIOS 設定ユーティリティ経由で LSI BIOS にアクセスします。
- 詳細は、『Netra Blade X3-2B 管理ガイド』を参照してください。

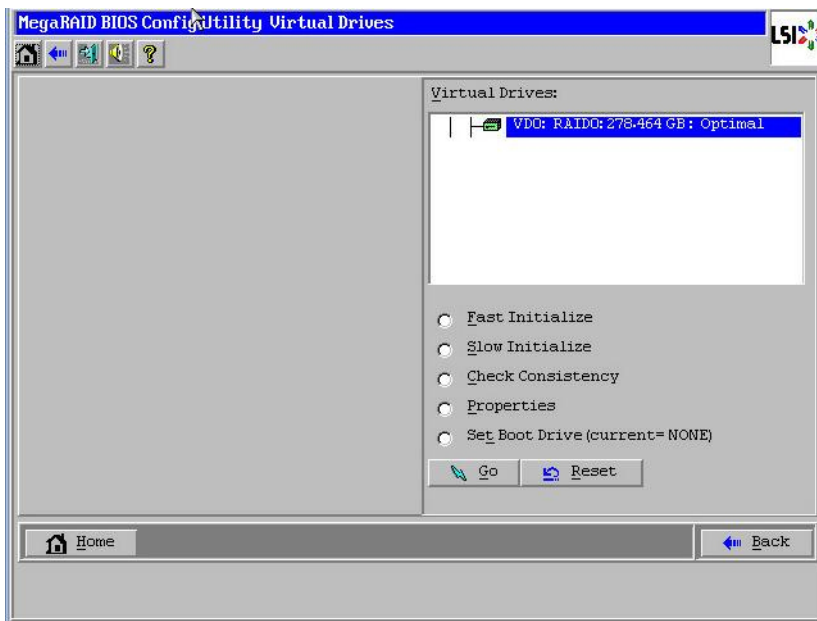
「Adapter Selection」画面が表示されます。



- 3 「Adapter Selection」画面で「Start」をクリックします。
「MegaRAID BIOS Configuration Utility Virtual Configuration」画面が表示されます。



- 4 「LSI BIOS Config Utility Virtual Configuration」画面で、「Virtual Drives」をクリックします。
「Virtual Drives」画面が表示されます。



- 5 ブート可能にする仮想ドライブを選択します。
- 6 「Set Boot Drive」をクリックして「Go」をクリックします。
操作が正常に終了すると、この仮想ドライブの「Set Boot Drive」値 (current= 選択した仮想ドライブ) が表示されます。
- 7 次のうち、使用している OS のインストールガイドに示された手順に従って OS をインストールします。
 - 『Netra Blade X3-2B ESX ソフトウェアインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Linux オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Oracle VM オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Netra Blade X3-2B Windows オペレーティングシステムインストールガイド』

インストール済み Oracle Solaris OS の構成

ブレード用にオプションのインストール済み Oracle Solaris OS イメージを購入した場合は、インストール済みの Solaris OS を構成することによってインストールを完了させます。Solaris OS イメージには、使用しているブレードモデルに必要なドライバがすべて組み込まれています。

注-インストール済み Oracle オペレーティングシステムの使用可能なバージョンについては、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』のサポートされているオペレーティングシステムのセクションを参照してください。

次の表に、インストール済み Oracle Solaris OS を構成するために必要なタスクを示します。

手順	タスク	リンク
1	Solaris OS のドキュメントを確認します。	69 ページの「Oracle Solaris OS のドキュメント」
2	使用しているブレード環境の構成ワークシートに記入します。	70 ページの「構成ワークシート」
3	インストール済み Oracle Solaris を構成します。	72 ページの「インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する」

Oracle Solaris OS のドキュメント

Oracle Solaris オペレーティングシステムの使用方法については、次を参照してください。<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris11/documentation/index.html>

構成ワークシート

次の情報を収集し、構成作業を開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報だけを収集すれば十分です。

必要なインストール情報	説明	回答:アスタリスク(*)はデフォルト
言語	OSで使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	英語(C-7ビットASCII)*
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムはネットワークに接続されていますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークに接続されている ■ ネットワークに接続されていない*
DHCP	ネットワークインタフェースの構成に、動的ホスト構成プロトコル(DHCP)を使用できますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
DHCPを使用しない場合は、ネットワーク情報を指定します	<p>システムの静的IPアドレスを指定します。 例: 129.200.9.1</p> <p>サブネットのネットマスクを指定します。 例: 255.255.0.0</p> <p>このマシンでIPv6を有効にしますか?</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
Kerberos	<p>このマシンでKerberosセキュリティを構成しますか?有効にする場合、次の情報を収集します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デフォルトレルム ■ 管理サーバー ■ 第1KDC ■ 追加のKDC(オプション) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*

必要なインストール情報	説明	回答:アスタリスク(*)はデフォルト
ネームサービス	<p>該当する場合は、このシステムで使うネームサービスを指定してください。</p> <p>システムが属するドメインの名前を指定します。</p> <p>NIS+またはNISを選択した場合、ネームサーバーを指定しますか?それとも、インストールプログラムに自動検出させますか?</p> <p>DNSを選択した場合、DNSサーバーのIPアドレスを指定します。少なくとも1つ以上のIPアドレスを入力する必要があります。最大で3つのアドレスを入力できます。</p> <p>また、DNSクエリーを行う際に検索するドメインのリストを指定することもできます。</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>検索ドメイン:</p> <p>LDAPを選択した場合、LDAPプロファイルに関する次の情報を入力します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ プロファイル名 ■ プロファイルサーバー <p>LDAPプロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ プロキシバインド識別名 ■ プロキシバインドパスワード 	<ul style="list-style-type: none"> ■ NIS+ ■ NIS ■ DNS ■ LDAP ■ なし* <ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 自動検出する*

必要なインストール情報	説明	回答:アスタリスク(*)はデフォルト
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定しますか? それとも、OS インストールプログラムに自動検出させますか?</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。次のいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのリポート時に、指定した IP アドレスがデフォルトのルートになります。 OS インストールプログラムに IP アドレスを自動検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上に存在していなければなりません。このルーターは、ルーター発見用にインターネット制御メッセージプロトコル (Internet Control Message Protocol, ICMP) を使用して自身を通知します。コマンド行インタフェースを使用する場合は、システムのブート時に IP アドレスが自動的に検出されます。 ルーターを使用していないか、現時点ではソフトウェアに IP アドレスを検出させたくない場合には、「None」を選択できます。ソフトウェアは、リポート時に IP アドレスを自動的に検出しようとしています。 	<ul style="list-style-type: none"> 指定する 検出する なし*
タイムゾーン	<p>デフォルトのタイムゾーンを指定する方法を指定します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 地理的地域* GM からの時差 タイムゾーンファイル
root パスワード	<p>システムの root パスワードを選択します。</p>	

関連情報

- 72 ページの「インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する」

▼ インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する

始める前に OS を構成するために必要な組織およびネットワーク環境情報を収集します。[70 ページの「構成ワークシート」](#)を参照してください。

- 1 Oracle ILOM にログインしていない場合は、直接シリアル接続を介してローカルでログインするか、Ethernet 接続を介してリモートからログインします。
41 ページの「ブレード SP Oracle ILOM へのログイン」を参照してください。
- 2 ブレードの電源を投入するか、再起動します。
 - ブレードの電源を投入するには、次のいずれかの方法を使用します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューで「Power On」を選択します。
 - Oracle ILOM CLI で、Oracle ILOM プロンプトに次のコマンドを入力します。
-> `start /System`
次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
Starting /System
 - ブレードを再起動するには、次のいずれかを実行します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューから「Reset」を選択します。
Oracle ILOM コンソール Web インタフェースに接続する方法の詳細は、47 ページの「ブレードに接続する(リモートコンソール)」を参照してください。
 - Oracle ILOM CLI で、Oracle ILOM プロンプトに次のコマンドを入力します。
-> `reset /System`
次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing hard reset on /System
ブレードがホストのブートプロセスを開始します。
Oracle ILOM コンソール CLI に接続する方法の詳細は、46 ページの「ブレードに接続する(シリアルコンソール)」を参照してください。
- 3 Oracle ILOM で、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。
ブレードがブートしたあとで、「GRUB」メニューが表示されます。

- Oracle ILOM CLI で、次のように入力します。

-> **start /HOST/console**

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

ブレードがブートしたあとで、「GRUB」メニューが表示されます。

注- 10 秒以内に何かキーを押さないと、デフォルトの選択 (シリアルポート) が使用されます。上下の矢印キーを押すと、「GRUB」メニューで一時停止します。

```
GNU GRUB Version 0.97 (607K lower / 2087168K)
Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Serial Port (ttya)
Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Graphics Adapter
```

- 4 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、Enter キーを押します。

表示の出力先を引き続きシリアルポートにするのか、ビデオポートに接続されたデバイスに切り替えるのかを選択できます。

- 出力をシリアルポートに表示するには:

```
Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Serial Port (tty)
```

- 出力をビデオポートに表示するには:

```
Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Graphics Adapter
```

注- 表示をビデオポートに出力することを選択した場合、VGA ディスプレイと入力デバイス (USB キーボードおよびマウス) を、ブレードの UCP ポートに接続されたマルチポート (ドングル) ケーブルに接続する必要があります。23 ページの「ブレードの配線」を参照してください。

- 5 Oracle Solaris 11 インストーラの画面上のプロンプトに従って、先に収集した組織およびネットワーク環境の情報を使用してソフトウェアを構成します。

ブレードへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

- 6 インストールが完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。

- Oracle ILOM Web インタフェースで「Remote Console」ウィンドウを閉じて、Oracle ILOM からログアウトします。

- Oracle ILOM CLI で、Esc キーのあとに "(" キー (Shift + 9) を押して、Oracle ILOM からログアウトします。

参考 関連情報

- [69 ページの「Oracle Solaris OS のドキュメント」](#)
- [70 ページの「構成ワークシート」](#)

インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成

ブレード上にインストール済みのオプションの Oracle VM ソフトウェアイメージを購入した場合は、インストール済みのソフトウェアを構成することによってインストールを完了させます。このインストール済みソフトウェアイメージには、サーバーモジュールに必要なすべてのドライバが含まれています。

注-Oracle インストール済みオペレーティングシステムの使用可能なバージョンについては、『Netra Blade X3-2B プロダクトノート』のサポートされているオペレーティングシステムのセクションを参照してください。

次の表に、インストール済み Oracle VM を構成するために必要なタスクを示します。

手順	タスク	リンク
1	使用しているブレード環境に合わせて Oracle VM Server 構成ワークシートに記入します。	77 ページの「Oracle VM Server 構成ワークシート」
2	インストール済み Oracle VM ソフトウェアを構成します。	78 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」
3	Oracle VM ソフトウェアを更新します。	81 ページの「Oracle VM ソフトウェアの更新」
4	Oracle VM オペレーティングシステムを使用します。	82 ページの「Oracle VM 入門」

Oracle VM Server 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成作業を開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報だけを収集すれば十分です。

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle VM Server のパスワード	<ul style="list-style-type: none"> ■ root パスワードを選択します。文字の種類や長さに制限はありません。 ■ Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは6文字以上でなければなりません。 	
ネットワークインタフェース	サーバーを管理するために使用するインタフェースを指定します。	
ネットワーク構成	<p>サーバーのIPアドレスを指定します。静的IPアドレスでなければなりません。</p> <p>例: 172.16.9.1</p> <p>サーバーがサブネットに属している場合、そのサブネットのネットマスクを指定します。</p> <p>例: 255.255.0.0</p> <p>サーバーにゲートウェイを介してアクセスする場合は、ゲートウェイのIPアドレスを指定します。</p> <p>ドメイン名サーバー (DNS) のIPアドレスを指定します。(ちょうど)1つのDNSが必要です。</p>	
ホスト名	<p>サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。</p> <p>例: ホスト名.oracle.com</p>	

関連情報

- [78 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」](#)

▼ インストール済み Oracle VM Server を構成する

次の手順では、ブレードにインストール済みの Oracle VM Server だけを構成する方法を示します。Oracle VM には、Oracle VM Manager などほかのコンポーネントもありますが、これらは仮想マシン環境をサポートするためにインストールされているかすでに稼働していなければなりません。

始める前に ソフトウェアを構成するために必要な組織およびネットワーク環境情報を収集します。77 ページの「[Oracle VM Server 構成ワークシート](#)」を参照してください。

- 1 ブレードの **Oracle ILOM** にログインしていない場合は、直接シリアル接続を介してローカルでログインするか、**Ethernet** 接続を介してリモートでログインします。[41 ページの「ブレード SP Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。

- 2 Oracle ILOM で、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。
- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。
ブレードがブートしたあとで、「GRUB」メニューが表示されます。
[47 ページの「ブレードに接続する \(リモートコンソール\)」](#)を参照してください。
 - Oracle ILOM CLI で、次のように入力します。
-> **start /HOST/console**
次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
ブレードがブートしたあとで、「GRUB」メニューが表示されます。
[46 ページの「ブレードに接続する \(シリアルコンソール\)」](#)を参照してください。

注-5 秒以内に何かキーを押さないと、デフォルトの選択 (シリアルポート) が使用されます。上下の矢印キーを押すと、このメニューで一時停止します。

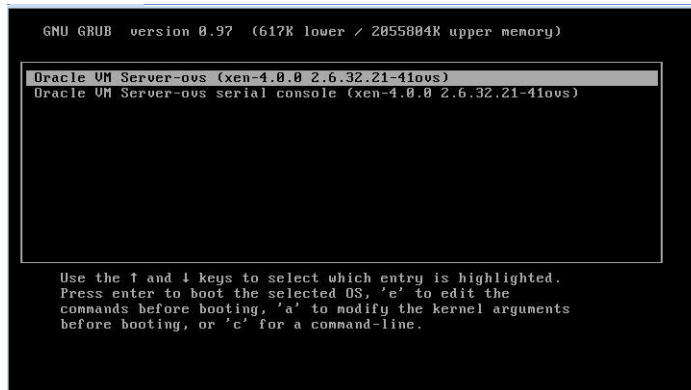
- 3 ブレードの電源を投入するか、再起動します。
- ブレードの電源を投入するには、次のいずれかの方法を使用します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューで「Power On」をクリックします。
 - Oracle ILOM CLI で、Oracle ILOM プロンプトに次のコマンドを入力します。
-> **start /System**
次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
Starting /System
 - ブレードを再起動するには、次のいずれかを実行します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューから「Reset」を選択します。
 - Oracle ILOM CLI で、Oracle ILOM プロンプトに次のコマンドを入力します。
-> **reset /System**

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing hard reset on /System
```

ブレードがホストのブートプロセスを開始します。ブレードがブートしたあとで、「GRUB」メニューが表示されます。

注-5秒以内にキーを押さなかった場合は、GRUBメニューが画面から消え、表示がデフォルトでシリアルポートに送信されます。「GRUB」メニューで一時停止するには、Enter以外の任意のキーを押します。次に、使用するオプションを選択し、Enterキーを押して続行します。



```
GNU GRUB version 0.97 (617K lower / 2055804K upper memory)

Oracle VM Server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)

Use the ↑ and ↓ keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments
before booting, or 'c' for a command-line.
```

- 4 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、Enterキーを押します。
 - 出力をビデオポートに表示するには、次に示すリストの最初のオプションを選択し、Enterキーを押します。

```
Oracle VM Server - ovs (xen-4.0.0 2.6.32.32-41ovs)
```
 - 出力をシリアルポートに表示するには、リストの2番目のオプションを選択し、Enterキーを押します。

```
Oracle VM Server - ovs serial console (xen-4.0.0
2.6.32.21-41ovs)
```

注-表示をビデオポートに出力することを選択した場合、VGAディスプレイと入力デバイス(USBキーボードおよびマウス)を、ブレードのUCPポートに接続されたマルチポート(ドングル)ケーブルに接続する必要があります。29ページの「[Oracle ILOMへの接続](#)」を参照してください。

- 5 **Oracle VM** インストーラの画面上のプロンプトに従って、先に収集した組織およびネットワークの情報を使用してソフトウェアを構成します。
- 6 インストールが完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで「**Remote Console**」ウィンドウを閉じて、**Oracle ILOM** からログアウトします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、**Esc** キーのあとに "(" キー (**Shift + 9**) を押してシリアルリダイレクトセッションを終了し、**Oracle ILOM** からログアウトします。
- 7 必要に応じて、**Oracle VM** ソフトウェアを更新します。
81 ページの「[Oracle VM ソフトウェアの更新](#)」を参照してください。

参考 関連情報

- Oracle VM Server ソフトウェアの取得:<http://edelivery.oracle.com/linux>
- Oracle VM テンプレートの取得:<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/templates-101937.html>

Oracle VM ソフトウェアの更新

システムにインストール済みの Oracle VM Server ソフトウェアを使用する場合は、Oracle VM インフラストラクチャーの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、使用している Oracle VM Server または Oracle VM Manager をアップグレードして、両者のバージョンを一致させてください。

Oracle VM ソフトウェアのアップグレードについては、次の Web サイトにある Oracle VM のドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

http://download.oracle.com/docs/cd/E20065_01/index.htm

Oracle VM 入門

Oracle VM の使用方法の完全な情報については、次の場所で入手できる Oracle VM のドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

http://download.oracle.com/docs/cd/E20065_01/index.htm

次に、Oracle VM 環境の設定に関するヒントをいくつか示します。

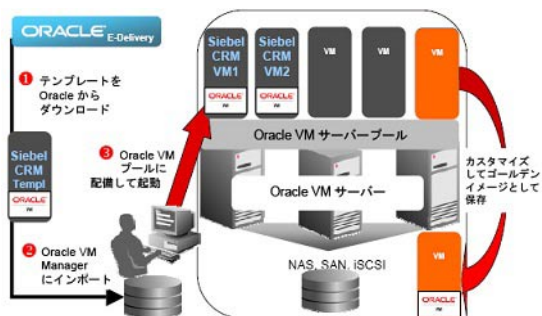
- Oracle Solaris と Oracle Linux の 2 つの VM が、インストール済みソフトウェアの構成プロセスの一部としてブレードにインストールされます。
 - Oracle Linux VM のデフォルト root パスワードは `ovsroot` です。
Oracle Solaris VM の root パスワードは、Oracle Solaris のインストール手順の一部として構成します。
 - 両方の VM のデフォルトコンソールパスワードは `oracle` です。
- ブレードを既存のサーバープールに追加するか、新しいサーバープールを作成します。

典型的な Oracle VM 配備では、複数の Oracle VM Server がサーバープールにグループ化されます。すべてのサーバーが外部共有ストレージに対するアクセス権を保有しています。Oracle VM Server ソフトウェアがインストール済みになっていると、プール内のブレードを共有ストレージに迅速に配置できます。

Oracle VM 3.0 のストレージとサーバープールに関する詳細は、Oracle VM のドキュメントを参照してください。

- ゲスト VM 用の適切な Oracle VM テンプレートをダウンロードおよびインストールします。

Oracle では、ビルド、構成、およびパッチ済みのゲスト仮想マシン (アプリケーションによっては複数の仮想マシン) を簡単に配備することができるテンプレートを用意しています。これらのテンプレートは、Oracle からダウンロードして、Oracle VM Manager を介して配備します。



テンプレートには、Siebel CRM や Oracle Database などの完全な Oracle ソフトウェアソリューション (オペレーティングシステム (Oracle Enterprise Linux) および内部開発またはサードパーティー製のソフトウェアを含む) を含めることができます。テンプレートは、個々の環境に合わせてカスタマイズすることもできます。詳細については、次にアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/templates-101937.html>

関連情報

- 77 ページの「Oracle VM Server 構成ワークシート」
- 78 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」

インストールに関する問題のトラブルシューティング

このセクションでは、インストールに関する問題のトラブルシューティング方法について説明します。

次の表に、ブレードのトラブルシューティングに関するタスクを示します。

タスク	リンク
ブレードの電源を切断して正常に停止します。	85 ページの「ブレードの電源切断による正常な停止」
ブレードの電源を切断して緊急停止します。 注- 上記のいずれかの手順に従ってブレードをシャットダウンした場合、保存していないデータは失われます。	87 ページの「ブレードの電源切断による即時停止」
ブレードをリセットします。	89 ページの「ブレードのリセット」
サーバーの障害を特定します。	90 ページの「ブレードの障害の特定」
ブレードの電源状態をトラブルシューティングします。	90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
ブレードの情報を記録してから保守部門に連絡します。	91 ページの「技術サポート情報ワークシート」
システムのシリアル番号の場所を確認してから保守部門に連絡します。	92 ページの「システムのシリアル番号の確認」

ブレードの電源切断による正常な停止

正常に停止するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。これらの手順を実行すると、ACPI 対応の OS では、オペレーティングシステムが正常に停止されます。ACPI が有効な OS を稼働していないブレードは、即座にスタンバイ電源モードにシャットダウンされます。

- 86 ページの「電源ボタンを使用する」
- 86 ページの「Oracle ILOM (CLI) を使用する」
- 86 ページの「Oracle ILOM (Web) を使用する」

▼ 電源ボタンを使用する

- ブレードのフロントパネルにある電源ボタンを押してから放します。

注-ブレードの電源を完全に切断するには、ブレードをシャーシから取り外す必要があります。

参考 関連情報

- 89 ページの「ブレードのリセット」
- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」

▼ Oracle ILOM (CLI) を使用する

- 1 ブレード SP または CMM の Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します。
 - ブレード SP CLI で、次のコマンドを使用します。
`stop /System`
 - CMM CLI で、次のコマンドを使用します。
`stop /CH/BLn/System`
ここで、*n* は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 89 ページの「ブレードのリセット」
- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 92 ページの「システムのシリアル番号の確認」

▼ Oracle ILOM (Web) を使用する

- 1 ブレード SP または CMM の Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
- 2 「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックします。
「Power Control」 ページが表示されます。

- 3 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します。
 - ブレード SPWeb インタフェースの「Actions」メニューから「Graceful Shutdown and Power Off」を選択します。
 - CMMWeb インタフェースで、「/CH/BL n /System」の横にあるラジオボタンをクリックし、「Actions」リストから「Graceful Shutdown and Power Off」を選択します。
ここで、 n は、ブレードが取り付けられているシャーシのスロットです。

参考 関連情報

- 89 ページの「ブレードのリセット」
- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」

ブレードの電源切断による即時停止

緊急停止するには、次のいずれかの手順を使用します。この方法を実行すると、ブレード上の保存されていないデータが失われます。

- 87 ページの「電源ボタンを使用する」
- 88 ページの「Oracle ILOM (CLI) を使用する」
- 88 ページの「Oracle ILOM (Web) を使用する」

▼ 電源ボタンを使用する



注意-即時停止を実行すると、ブレード上の保存されていないデータが失われます。

- 電源ボタンを 5 秒間押し続けると、主電源が切れてスタンバイ電源モードに移行します。

注-ブレードの電源を完全に切断するには、ブレードをシャーシから取り外す必要があります。

参考 関連情報

- 89 ページの「ブレードのリセット」
- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」

▼ Oracle ILOM (CLI) を使用する



注意 - 即時停止を実行すると、ブレード上の保存されていないデータが失われます。

- 1 ブレード SP または CMM の Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します。
 - ブレード SP CLI で、次のコマンドを使用します。
`stop -force /System`
 - CMM CLI で、次のコマンドを使用します。
`stop -force /CH/BLn/System`
ここで、*n* は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 89 ページの「ブレードのリセット」
- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 92 ページの「システムのシリアル番号の確認」

▼ Oracle ILOM (Web) を使用する



注意 - 即時停止を実行すると、ブレード上の保存されていないデータが失われます。

- 1 ブレード SP または CMM の Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
- 2 「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックします。
「Remote Power Control」 ページが表示されます。
- 3 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します。
 - ブレード SP Web インタフェースで、「Actions」 リストから「Immediate Power Off」を選択します。

- CMM Web インタフェースで、「/CH/BL n /System」の横にあるラジオボタンをクリックし、「Actions」リストから「Immediate Power Off」を選択します。
ここで、 n は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 89 ページの「ブレードのリセット」
- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」

ブレードのリセット

ブレードを単にリセットする場合は、ブレードの電源を再投入する必要はありません。

次の各セクションでは、ブレードをリセットする方法の手順を示します。

- 89 ページの「Oracle ILOM CLI を使用してブレードをリセットする」
- 90 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用したブレードのリセット」

▼ Oracle ILOM CLI を使用してブレードをリセットする

- 1 ブレードまたは CMM の Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します。
 - ブレード SP CLI で、次のコマンドを使用します。
`reset /System`
 - CMM CLI で、次のコマンドを使用します。
`reset /CH/BL n /System`
ここで、 n は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したブレードのリセット

- 1 ブレード SP または CMM の Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
- 2 「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックします。
「Power Control」 ページが表示されます。
- 3 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します。
 - ブレード SP Web インタフェースで、「Actions」メニューから「Reset」を選択します。
 - CMM Web インタフェースで、「/CH/BL n 」の横にあるラジオボタンをクリックし、「Actions」リストから「Reset」を選択します。
ここで、 n は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 90 ページの「ブレードの電源状態のトラブルシューティング」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 92 ページの「システムのシリアル番号の確認」

ブレードの障害の特定

ブレードの電源投入時に「Server Action Required」LED が点灯する場合は、Oracle ILOM をチェックして、システム障害が発生していないか確認してください。

ブレードの障害の特定に関する詳細は、『Netra Blade X3-2B サービスマニュアル』を参照してください。

ブレードの電源状態のトラブルシューティング

Sun Netra 6000 モジュラーシステムでブレードの電源が入ると、システムは CMM に照会して、ブレードの電源を入れるのに十分な電力が電源ユニット (PSU) から供給可能かどうかを確認します。

ブレードの電源投入に十分な電力が得られない場合、CMM はブレードが主電源から電力供給を受けるのを禁止します。この状態になると、ブレードのフロントパネルにある OK 電源 LED が、スタンバイ点滅したままになります。

この電源問題をトラブルシューティングするには、次のガイドラインに従って操作します。

- Oracle ILOM のイベントログメッセージを見て、ブレードに電源投入の権限があるかどうかを確認します。ブレードの電源投入に十分な電力がシャーシの PSU から得られない場合、イベントメッセージがログに記録されます。

Oracle ILOM イベントログ、または消費電力の監視については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリを参照してください。

- 現在取り付けられているすべてのシャーシコンポーネントの電源投入をサポートするのに十分な数の電源が、システムシャーシに取り付けられていることを確認します。

シャーシコンポーネントの電源投入に必要な電源の数については、システムシャーシのドキュメントを参照してください。

- 電力損失を避けるため、電源に対するデフォルトの CMM 電源管理設定を Oracle ILOM で使用します。

電源管理の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

注 - 電源投入の権限が得られた場合、ブレードのフロントパネルにある OK/電源 LED がスタンバイ点滅状態になります。

- 必要に応じて、ブレードに付属する起動診断ツールを実行する方法について、『Oracle x86 サーバー診断ガイド』を参照してください。

関連情報

- 85 ページの「ブレードの電源切断による正常な停止」
- 87 ページの「ブレードの電源切断による即時停止」
- 91 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 92 ページの「システムのシリアル番号の確認」

技術サポート情報ワークシート

このトピックのトラブルシューティングの手順を使用しても問題を解決できない場合は、次の表を使用して、サポート担当者に伝える必要がある情報を収集してください。

必要なシステム構成情報

お客様の情報

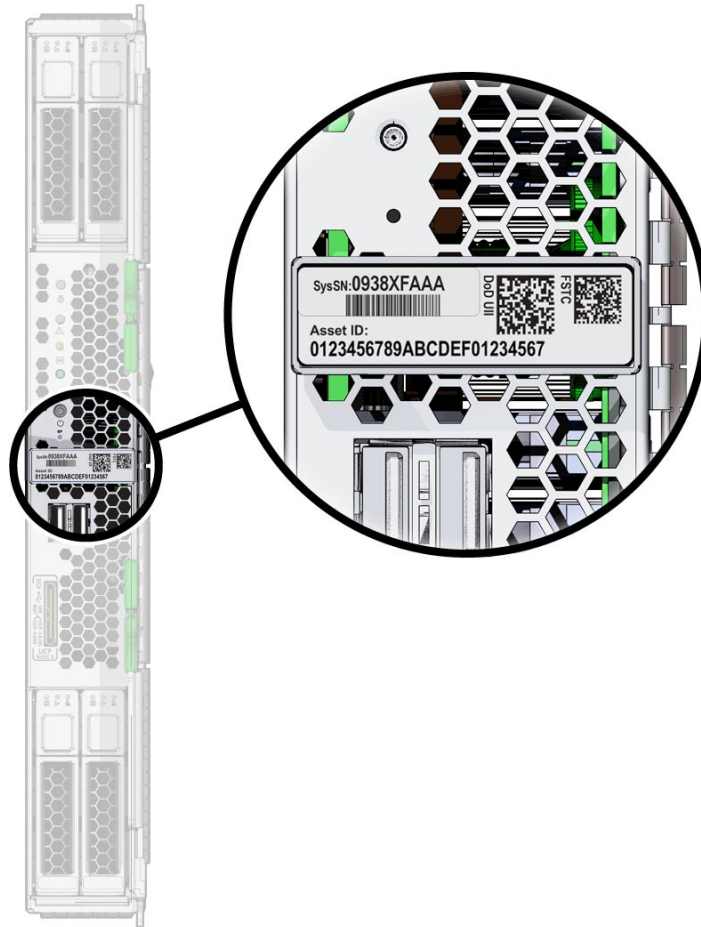
サービス契約番号

システムモデル

必要なシステム構成情報	お客様の情報
オペレーティングシステム	
システムのシリアル番号	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題のサマリーと、問題が発生したときに実行した操作内容	
IPアドレス	
サーバー名(システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

システムのシリアル番号の確認

ブレードに対する Oracle 保証サポートが必要な場合は、シリアル番号が必要になります。シリアル番号は、ブレードのフロントパネルに貼付されているラベルに記載されています。



シャーシのシリアル番号が必要な場合もあります。

注-ブレードおよびシャーシのシリアル番号は、Oracle ILOM CMM で表示することもできます。Oracle ILOM CMM の使用法の詳細は、29 ページの「Oracle ILOM の概要」を参照してください。

使用している製品のサポートおよび保証情報については、次を参照してください。

<http://support.oracle.com>

関連情報

- 18 ページの「追加コンポーネント」

索引

C

CLI, Ethernet を使用した Oracle ILOM へのアクセス, 44
CMM, Oracle ILOM CMM の概要, 31
CPU, サポートされている, 7

D

DIMM, サポートされている, 7

F

FMod にインストール済みの Oracle VM, 77-83
FMod にインストール済みの Solaris 10 (x86), 77-83

I

ILOM

CLI を使用したホストコンソールへのアクセス, 46
Oracle ILOM CMM の概要, 31
Web インタフェースを使用した IP アドレスの表示, 36-39
Web インタフェースを使用したホストコンソールへのアクセス, 47-50
イベントログ, 90
設定タスク, 29-50

IP アドレス

Oracle ILOM CLI を使用した SP アドレスの取得, 39-41

IP アドレス (続き)

Oracle ILOM Web インタフェースを使用した SP アドレスの取得, 36-39

L

LED, 9
LSI BIOS 構成ユーティリティ, 65-68

O

Oracle ILOM

CLI を使用した IP アドレスの表示, 39-41
Web インタフェースを使用したログイン, 41-43
アクセス方法, 41
概要, 29
コマンド行インタフェース (CLI) を使用したログイン, 44
サーバーモジュール Oracle ILOM SP の概要, 33
シリアル接続を使用したログイン, 44-45
ホストコンソールリダイレクション, 45

Oracle Solaris 11, 69-75

Oracle ILOM を使用したサーバーの管理, 29-50
OS、インストール済みイメージの構成, 69-75, 77-83

S

SP, サーバーモジュール Oracle ILOM の概要, 33

U

USB フラッシュドライブ, 仕様, 13

W

Web インタフェース, Ethernet を使用した Oracle ILOM へのアクセス, 41-43

あ

アクセス

Oracle ILOM, 41

シリアルホストコンソール, 45

い

位置特定ボタン/LED, 9

インジケータ (LED), 9

インストール

OS インストール済みオプション, 69-75, 77-83

インストール済み OS オプション, 69-75

FMod 上の Oracle VM, 77-83

FMod 上の Solaris 10 (x86), 77-83

Oracle Solaris 11, 69-75

お

オプションのコンポーネント, 18

オペレーティングシステムのサポート, 8

温度仕様, 13

か

概要、ブレード, 7-14

仮想ディスク、「ボリューム」を参照

環境仕様, 13

き

機能リスト, 7

こ

高度仕様, 13

互換性

NEM, 7

シャーシ, 7

メモリー, 7

コマンド行インタフェース (CLI), 「CLI」を参照
コンソール, シリアルホスト接続, 45

さ

サーバーモジュール, 取り付け, 19-21

し

湿度仕様, 13

シャーシサポート, 7

シャーシミッドプレーンサポート, 7

出荷キットの内容, 16

準備

ハードドライブ

LSI BIOS 構成ユーティリティー, 65-68

Oracle System Assistant, 63-65

シリアル接続、Oracle ILOM での使用, 44-45

シリアル番号の場所, 92

す

ストレージオプション, 9

寸法仕様, 12

せ

製品の機能と仕様, 7

て

電圧仕様, 13
電氣的仕様, 13
電源状態、トラブルシューティング, 90
電源状態のトラブルシューティング, 90
電力仕様, 13

と

取り付け, シャーシへのブレードの取り付け, 19-21
取り付けタスクの概要, 15
ドングル, 「ユニバーサルコネクタポート (UCP)」を参照

は

ハードドライブ
準備
LSI BIOS 構成ユーティリティ, 65-68
Oracle System Assistant, 63-65

ふ

ブラウザ、Oracle ILOM での使用, 41-43
フロントパネル LED, 9

ほ

ホストシリアルコンソール, Oracle ILOM 経由の接続, 45
ホストバスアダプタ (HBA), サポートされている, 59
ボリューム
作成, 65-68
LSI BIOS 構成ユーティリティ, 65-68
Oracle System Assistant, 63-65

ま

マルチポートケーブル, 44-45

め

メモリー, 「DIMM」を参照

ゆ

ユニバーサルコネクタポート (UCP), 9

り

リモートコンソール、Oracle ILOM 経由のアクセス, 45

